
Fate/Love & Peace

フリスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / L o v e & a m p ; P e a c e

【Nコード】

N 2 4 2 5 Q

【作者名】

フリスタ

【あらすじ】

8人目のサーヴァントとして召喚された優男。それは存在しないはずの【ガンナー】だった。

【ヒューマノイド・タイフーン】と恐れられた伝説の賞金首ヴァッシュ・ザ・スタンピードがFateの世界を駆け巡る!?

これは『Fate/stay night』と『TRIGUN』の二次創作です。

ヴァッシュのサーバント能力表（前書き）

デキトーと言えばデキトー

ヴァッシュのサーヴァント能力表

【クラス】

ガンナー

【マスター】

バゼット・フラガ・マクレミッツ

【真名】

ヴァッシュ・ザ・スタンピード

【二つ名】

ヒューマノイド・タイフーン

【属性】

中立・善

【筋力】	B	【魔力】	E
【耐久】	C	【幸運】	E
【敏捷】	A	【宝具】	S

【保有スキル】

不殺：A+

呪いクラス。敵味方問わず殺さずを貫く。

騎乗：E

乗れなくはないが、下手くそ。

無限の弾丸

マスターとのパスが繋がっている限り、スピードローダに勝手に補充される。弾切れを起こさない。

単独行動：A+

パスが繋がってるだけで、魔力供給とかがほとんど無い。消費もほとんど無いため、例え契約が切れてもあまり問題ない。

【宝具】

ヴァッシュの銃（銀）・ナイブズの銃（黒）
ランク：B

対人宝具

レンジ：1～10

最大捕捉：1

かなり重厚なりボルバー式拳銃。マグナム以上の威力があり、銃を使う者でもかなり重く感じる。過去に照準が大幅にズレるなどがあったが、シリンダーの交換などにより。修理済み。

隠し銃

ランク：B

対人宝具

レンジ：1～5

最大捕捉：3

左腕は義手。普段は普通の手にしか見えないが、それが高威力なサブマシンガンに変形する。

プラント

ランク：A

対人宝具

レンジ：1

最大捕捉：1

人外の戦闘能力、身体能力、射撃技術とずば抜けた反射神経、しぶとさを持ち、随所で人間を遥かに超えた能力を見せる。その正体は、突然変異によって生まれたプラントの「自立種」……つまり純粋な

人間ではない。

エンジェル・アーム

ランク：EX

対軍宝具

レンジ：1～ ∞

最大捕捉：1～ ∞

身体と同化して放つ銃による砲撃。これが月に穴を開けたモノ。砲撃で月に着弾した際は肉眼ではつきりと確認できるほどの巨大なクレータができ、地表近くで暴発しただけで数百万人の大都市を消し去った程の威力を出した。

第01話 「ガンナー」（前書き）

ノリで書き始めました。

予定してなかった新作に作者自身が驚いています。

予定している新作はまたちゃんと書きますw

こっちはのんびり気分で書いていきます。

ヴァッシュ知ってる人いるかな？ 作者はヴァッシュが大好きだ！！
ちなみにこの小説、アニメ版【TRIGUN】の終わった後を想定
して考えてますので、ウルフウッドさんは出てきません！！ ウル
フウッドファンの方はゴメンナサイ！！

第01話 「ガンナー」

（ここは……？ 僕は確かナイブズと戦って、街に連れ帰って……）

街の宿で、疲れ眠っていたはずの金髪の男。

目が覚めて気がついた時は暗闇の中。

視界が急に明るくなる。そこは砂漠だった。

太陽は照りつけ、汗が滲む。

この砂漠に何も無いのか？ と思えばそうでもない。

地面には廃墟と化した建物と思われる残骸が埋もれて見えている。

（ぼ、僕がやったのか……？）

『いいえ、違います』

目の前に現れたのは聖職者の格好をした女の人。しかし、実態ではない透けた姿をしている。

『ここはあなたの記憶に残るモノを集約した世界。現実ではありません。あなたは選ばれたのです。ヒューマノイド・タイフーン』

一陣の強い風が吹く。

熱砂にはためく赤いコート。都市を灰に変える悪魔の使い。

ヒューマノイド・タイフーンの異名を持つ伝説の賞金首。その額600億\$。

人の身でありながら、人類初の局地災害指定となった伝説の男。

その名はヴァッシュ・ザ・スタンピード。

箒のようにツンツンに逆立てた金髪がトレードマークで、左耳には金色のピアスが輝いている。過去に数千万人規模の大都市ジュライを一瞬の内に消し去り、巨岩の都市を消し飛ばし、月に地上から確認出来るほどの巨大な穴を穿った人物だ。

（選ばれた？ 僕が……何に？ 聖杯戦争？
なんだ？ 頭の中に情報が流れ込んでくる）

『聖杯戦争は、聖杯によって選ばれた七人のマスターが、サーヴァントと呼ばれる聖杯戦争のための特殊な使い魔を使役して戦いあう形をとる。あなたはそのサーヴァントに選ばれました。最後の一人になるまで戦い抜き、サーヴァントの魂を聖杯に捧げた時、願いは叶います』

（願……僕には願いなんて……）

『でも、選ばれちゃいましたから』

急にラフな感じの口調になる女の人。

（こ、断ったりとかは……？）

『出来ませうん。イヤなら召喚された瞬間に自殺してくださいまし』

(自殺？ それは僕が一番嫌いな行為だ……)

突然、ヴァツシュの足元が白い光に包まれる。

『強制召喚されましたね。頑張ってください。あなたのクラスはガンナーです。8人目のサーヴァントさん。あ、そうそうコレを持って行くと良いわ。必要なモノが入ってるから』

(説明は頭に入ってたけど『ガンナー』なんてサーヴァントはいなかったああああ……)

叫びながらもヴァツシュと一緒に投げ込まれたカバンは光の中へと消えて行った。

ある意味、奈落の底に引きずり込まれたと言っても良いかもしれない。

——冬木市。

バゼット・フラガ・マクレミッツは歴代最強とされる「封印指定の

執行者」だ。そして、今回の聖杯戦争ではランサーの本来のマスター。そう、ランサーのマスター“だった”。バゼットは聖杯戦争の監督者である言峰綺礼に協力を求めるが、騙し討ちにあって左腕ごと呪いを奪われ、今はマスターでは無い。既に瀕死の状態となっている彼女は、生きる事を諦める直前であった。

そこへ白い魔法陣が浮かび上がる。召喚の魔法陣だ。しかし起動させた者は誰もいない。では、一体誰が？ それはバゼットの血であった。自覚も無く、意識も消えかけそうな彼女から流れ出る血がソレを喚んでいた。

薄れゆく意識の中で彼女は赤いコートを見た。

ヴァッシュは召喚された。目の前にはマスターと呼ばれる人物がいる。召喚者だと、マスターだと、身体の奥底で認識する。しかし、マスターは血まみれだ。左腕が無い。

「ほああああ！？ えらいこつちやゝ！！ 止血するもの！！」

ゴンッ

頭に落ちてきたのは大きめのカバンだ。召喚される直前に一緒に投げ込まれたモノだ。

「いたたたたあゝ……くうゝ使えるモノ入っててくださいよおゝ？」

カバンの中には左腕が入っていた。義手とかではなく、生身の腕が入っていたのだ。

「……えええゝ……でも状況的にコレしかないんだよなゝ……お願いしますよゝ？」

左腕をスーツ姿の女性にあてがう、それに包帯で固定をしようとするが、腕が光り出す。

「な、何ですとゝ！？」

光が収まると腕は接合していた。水たまりの様に広がっていた血も無い。

「……う？　ここは？」

「ほわあああああゝゝ」

ヴァッシュは起き上がる女性マスターを見て手を祈る様に組み、歓喜の声を上げた。……無事助かったという点もあるが、脳内のほとんどは綺麗な女性だったからという理由が占めていた。

「あ、あなたは？」

「ども、サーヴァントのガンナーですう。マスターのお名前は？」

「ま、マスター？ 私はランサーの……はっランサー……言峰……いや、しかし腕が……失礼ですが、私の腕はどの様に？」

まだマスターと呼ばれる事に疑問を覚えるバゼットは目の前の赤いコート of 優男に礼儀正しく質問をした。

「いや、流石はマスターです。腕を添えたら勝手にくつついちゃうんですもん。無事でよかったですねマスター。で、お名前は？」

「くつついた？ 私にそんな力は……っ！？」

そして、バゼットは少しばかり落ち着きを取り戻したのか、目の前の優男とパスが繋がっている事に気がついた。

「ほ、本当にサーヴァントなのですか？」

「ヴァッシュ・ザ・スタンピードと言います……！ お近づきのしるしに熱い口付けを……！」

「け、結構です……！ しかし……危ない所を助けてもらったようで……私はバゼット・フラガ・マクレミツ。……あなたのマスターという事でよろしいですね？」

「バゼットちゃんか……よろしく……」

「バゼットちゃん！？ ……ンツ……！ よろしくお願いします。ヴァッシュ。ですが、あなたは先ほど聞き慣れない事を言いました。ガンナー何て聞いた事ありません」

「僕もそう思ったさ。でもきつと運命だったんだよ。僕とバゼットちゃんが出会うのは運命だったのさ」

駄目だ。会話が成立していない。バゼットは額に手をあて、軽い優男から視線をずらす。そこにはカバンがあった。

「ヴァッシュ。コレはなんですか？」

「ああ、何だろうね？ コレは……」

カバンの中に入っていたのはヴァッシュのゴツいリボルバー式の銃とお揃いのナイブズの黒い銃、そして、スピードローダー（ ）と数種類の弾だった。

スピードローダー：リボルバー式の拳銃に一発一発、弾を手で込めるのではなく、一気に6発補充できるリロードの器具。

「本当にガンナーなんですか……では早速、あなたの力を見せてもらいましょうか。他のサーヴァントの位置を探ってください」

「あ、それ無理。僕戦いたくないもん」

「いや、無いもんって、サーヴァントでしょう！？ あなたも叶えたい願いがあって召喚されたのでは!？」

「生きているのに殺し合うなんて駄目だって、この世はlove & peaceだよ。バゼットちゃん」

「……ならば、私だけでも行きます!!」

「ちよつ！ バゼットちゃん！？

…… ふう仕方ないかな…… 聖杯戦争か」

バゼットが部屋を後にしたのを見送り、ヴァッシュはその軽い表情を変えた。サーヴァントとして召喚された以上ヴァッシュも理解はしていた。聖杯戦争。とどのつまり殺し合いだ。ナイブズの黒い銃を左手に持ち、ヴァッシュは重く何かを思い出していた。

「……でも、やっぱり殺したくないし、誰かが死ぬのは嫌だ」

ヴァッシュはマスターであるバゼットの気配を追う事にした。

夜の街。

どこへ行っても人はおらず、探しても人はいない。

バゼットは焦っていた。

監督者である者に殺された事もあって、自分の実力でこの戦いを行きぬけるのかと。ランサーを失い、幸運にも生き残った自分が、また何の奇跡なのか、聞いた事も無い『ガンナー』というサーヴァントを得た。力量は分からない。ヴァッシュ・ザ・スタンピードという名前も聞いた事が無い。英霊である事は間違いないが、いつの時代のどんな英霊なのか？ ガンマンの英霊、実力は不明。分かっている事は一つ、その英霊に戦う気が無いと言う事だ。

橋を越えたところで、バゼットはその日の行動を終了する事にした。収穫は何もない。体調もまだ万全とは言えない。バゼットは来た道

を引き返すことにした。

「あゝいたいたゝバゼットちゃん」

「ヴァッシュ……どうしたのです？ 戦う気はないのでしょうか？」

……ですが戦う時は令呪を使用してでも戦わせますからね」

「うわっ 嫌だなそれ。とりあえず聖杯戦争は切り抜けようと思つてね」

「やる気になつたと言つのですか？」

「愛と平和の為に！！」

何を言ってるんだこのサーヴァントは……バゼットはそう思いつつ、戻る事にした。とりあえず、この英霊の事を調べてみようと思つたのだ。焦つてまた死にかけても問題だと考え、今は冷静に今の状況、戦力を調べることにした。

第01話 「ガンナー」(後書き)

感想は随時受付中ですが、あまり虐めないでください

L o v e & p e a c e ! !

第02話 「真名」(前書き)

あ、そう言えば能力値書いてなかったな。
書くか。

第02話 「真名」

冬木市では最近、ガス漏れ事件に通じ魔事件と、夜は本当に人通りが少なくなる。

赤いコートのお気楽で優男のサーヴァント、不殺を心に決め込むヴァッシュは、その事件が起きそうな時には毎回同じ気配を感じていた。

しかし

「今回も空振りですか……戦いたくないからと言って、わざと遅れて気が付いたふりをしてるんじゃないでしょうね？」

「誤解だあ！ 相手が引き上げるのが早すぎるんだ。でも多分本人は来てない……」

「使い魔だとも言うのですか？ だとしたら……キヤスター」

魔術師のサーヴァント【キヤスター】

ヴァッシュの勘、バゼットの推理は合っていた。しかし、掴みきれないでいる。

「仕方ありません。しかし、今日もあなたの銃の弾に魔力を込めるだけになりそうですね」

「別に良いよお？ 戦うわけじゃあるまいしい」

「何か言いましたか？」

「……何も（おおゝ怖っ）」

そのままその先の事は何も掴めないまま、日は過ぎて行った。

時は経ち、穂群原学園。

学園と言っても学園としては機能していない。何故なら今は夜で先生も生徒も帰っているからだ。しかし、校庭には青と赤の光が剣戟を以って、その存在を誇示する。

「てめえどこの英雄だ！ 二刀使いの弓兵など聞いた事がねえぞお！！」

「ふん、そういう君は分かりやすいな。これほどの槍使いはただ一人」

青いルーンの加護を受けた服に身を包み見事に紅い槍を自在に操るのがランサーのサーヴァント。それに対峙するのが赤い服装の二刀の短剣を手に変幻自在の槍を防ぐ男がランサーの言うとおり、弓兵、アーチャーのサーヴァントである。

それを観察している人影が4つある。

一つは校庭内におり、女子学生の制服に身を包むアーチャーのマスターである遠坂 凛。

一つは校庭をフェンスで挟むような形で呆然と事件に遭遇した男子学生である衛宮士郎。

そして、その対角線上に位置する茂みにいる2つ、ヴァッシュとバ

ゼットだ。

「ランサー……」

「バゼットちゃんの前のサーヴァントだね。っていうか赤い服の人、僕と被ってるんだよね。僕の方が良い男だけど」

「……いずれにせよチャンスです。ここで叩きます」

「叩きませんってば」

「な、何ですか!?!」

大きな声だった。これが「聞こえませんでした」と言う人はいないだろう。

「誰だ!?!」

「ああ、バレちゃったじゃない。バゼットちゃんが大きな声出すから」

「バゼット……!」

「くっ! 仕方ありませんね。ガンナー、あなたの力、ここで見せなさい!」

「ぼ、僕っすかあ!?!」

「サーヴァントでしょうが!?!」

アーチャーとそのマスターは新たに現れたサーヴァントとマスターを前に、様子見を始めた。

「また赤いやつか、流行ってるのか？ …… まあいい、やる気が無いようだが…… その気にさせてやるよぉ！！」

青い砲台から飛んでくる赤い線がヴァッシュに襲いかかる。

ヴァッシュはオレンジ色のレンズのメガネを掛け、その線を途中で止めた。

ドンドンドンッ！！

3発の銃声だった。

「拳銃！？ アイツ何のサーヴァントなの！？」

「凜、少し離れるぞ」

凜はアーチャーの言葉に従い、アーチャーの言う安全圏まで下がった。

そして、考え始める。拳銃使いのサーヴァント。クラスで言うところのアーチャーになりそうなものだが、アーチャーは自分のすぐ真横にいる。

では、キャスター？ いや、キャスターならこんな近くまで来て戦闘するとは考えにくい。

では、バーサーカー？ …… じゃないのは一目で分かる。

では、自分が召喚出来なかったセイバー？ 銃を使っておいて？

では、アサシン？ …… シックリくる気もするが、あの目立つ格好で、しかも大きな銃声で

アサシンというのも違和感が残る。それにアサシンなら暗殺だろうから目立って行動もしないか…… 特殊なアサシンの可能性もあるが。

では、ライダー？ 騎乗している物や、出来そうなものは見当たらないが、現状の可能性として一番高い気がする。

「アーチャーと思う？」

「ライダーの可能性が高いか…… しかし、銃を使うサーヴァントか…… ボンドでも次元でもなさそうだが……」

何でコイツの口からそんな名前が出てくるのだろうという疑問はその時は浮かんでこなかった。しかし、拳銃で英雄とも言える様な有名人というのも難しいものだ。というか魔術師である以上、詳しくも無い。

とにかく見ているしかない状況であった。

「チツ！ 銃か……」

サーヴァントとして召喚される以上、召喚された世界の事は大まかに頭にインプットされる。銃という知識も少ないながらもあるのだが、戦うとなると別の話だ。

「あの〜止めにしません？ ほら、死んじゃったら大変ですしい」

「……バカかお前？ 死ぬのが怖くて参加してる奴なんていねえんだよー!!」

青い槍使いは止まらない。

しかし、ことごとくヴァッシュはその槍を撃ち、攻撃の手を止める。弾をリロードするも、その速さに隙は生まれない。

ランサーは苛立つ、攻めきれない事もそうだが、何よりも殺す気でやってないのに苛立つ。どの弾道も槍自身に向かってくる。使い手である本人を狙って来ない事が、苛立ちを加速させて行った。

「てめえ……ふざけるのも大概にしろよお!!」

パキッ

その時、枝を踏み折る音が聞こえた。一同が視線をそちらに向けると、男子学生である傍観者の衛宮士郎がそこにいた。見つけた男子学生はすぐさま逃げ始めた。

「誰だ!」

「しまった、まだ学校に人が残っていたなんて!!」

アーチャーのマスターの声がヴァッシュまで届いてくる。

【聖杯戦争出場者以外の無関係者や一般人に見られた場合は、
掟により速やかに口を封じ抹殺しなければならない】

そのルールが頭に浮かびあがった瞬間、ランサーはヴァッシュへの
攻撃を止め、男子学生を追った。

「くっ！」

ヴァッシュはそれを追う、アーチャーのマスターも追ってくるが、
敵対というわけではないようだ。というか、あまつさえ質問をして
きた。

「あなた、何のサーヴァントなの？」

「ガンナー、何故倒さずに一緒に行くのですか？」

「凜、敵である者に不用意に近づくのは賛同出来ぬのだが……」

「君、僕と被ってるんだよ！ 服の色を変えて出直して来てよねえ
！」

こんな時でさえヴァッシュは軽口を止めない。そして、会話もごち
やごちやだ。

「あらアーチャー、このサーヴァントのさっきの戦い方を見て、こ
の場で殺し合うと思ってる？ それに銃使いのサーヴァントなんて
聞いた事が無いわ？ あなたはライダー？」

「僕は乗り物苦手なの、一応【ガンナー】ってクラスらしいんだけ
ど？」

「ガンナ〜？ 聞いた事が無いわ……真名は？」

「真名？ 何それえ？」

「ガンナー！ 敵と慣れ合うのは止めなさい！」

「凜、ストレートに聞いても無駄だと思うが……しかし、私と同じ記憶が無いのか？」

「名前よ、あなたの名前」

「僕の名前はヴァッシュ・ザ・スタンピードおー！」

「「「……」」」

…… 答えた。

「何を当然かの様に答えてるんですかー！」

バゼットは手袋を嵌めた拳を惜しみなくヴァッシュの頭に入れまくる。

「あ痛アっ！！ ごめんなさい！ ごめんなさい！」

「何なのよあんた達……でも聞いた事が無いわ……アーチャーは？」

「私も聞いた事が無いな」

そして、ランサーの気配を追って、階段を駆け上り、角を曲がったところで男子学生は見つかった。既に死んでしまった状態で。

「……………どうしてアンタなのよ！」

アーチャーのマスターの凜と呼ばれる女の子はこの巻き込まれた少年を知っているようだ。

「ガンナー、ここにはもう用はありません、行きますよ。ガンナー？ なっ！？ 泣いてるのですか？」

「だってまだ若いのに……………巻き込まれただけなのに……………」

「随分と変わったサーヴァントの様だ……………凜、私はランサーを追う、マスターの居場所ぐらいは知りたいからな」

「ええ」

「待ちなさいアーチャーのサーバント。マスターだけを置いていくつもりですか？ このガンナーならともかく、私ならあなたのマスターを殺しますよ？ 安心しすぎではないですか？」

それはそうだ。雰囲気飲まれすぎだろう。

「しかし、ここまで手を出して来なかった礼代わりです。ランサーのマスターの居場所なら知っています」

「えっ！？」「何だと！？」

「ランサーのマスターは教会にいます」

「リタイアしたとも言うのか？」

「いえ、マスターは言峰綺礼です」

「「なっ!？」」

「では、私達はこれで失礼します。行きますよガンナー」

「綺礼がランサーのマスター？」

「……凜、深く考えるな。ヤツ等も敵だと言う事を忘れるな。嘘の情報の可能性が高い。もし本当だとして、ヤツ等が乗り込まないのが不思議だ」

「わ、分かってるわよ。い、今はそんな事より!」

凜は魔力を溜め続けたとっておきのペンダントを外し、衛宮士郎を蘇生させ始めた。

「全く、君は無駄な事をしているぞ、大事な魔力の宝石を……」

「いいから黙っててアーチャー! 集中できない!」

その日、マスターは8人目が現れ、
サーヴァントもまた8人目が確認された。

第02話 「真名」(後書き)

感想は随時受付中。

第03話 「休戦協定」(前書き)

言っの忘れてましたが、シリアス成分かなり薄めで提供いたしてお
ります。

ギャグ路線が強めですね。だって作者がフリスタですからw

第03話 「休戦協定」

遠坂凜は目の前の何も知らない8人目のマスターと共に言峰教会に来ていた。ガンナーのマスターが言うには、言峰綺礼はランサーのマスターだと言う事だが……。

「どうしたんだよ、遠坂？」

「何でもないわ」

遠坂凜はいつも通りにしようと考えた。手札のアーチャーはいない。隣にいる衛宮士郎は何も知らない素人以下。もし、言峰がマスターだとしたら、ここでバッドエンドになる可能性が高いからだ。

教会ではいつも通りの言峰綺礼がいる。見える肌に令呪は見えないが、顔以外には手の平と甲ぐらいしか見えないため、「マスターではない」と判断するのも早計だった。

衛宮士郎と言峰綺礼の会話は終わる。

遠坂凜は、とりあえずの疑問を晴らすことにした。

「綺礼。ガンナーって呼ばれるサーヴァントに心当たりは？ その名の通り拳銃を使うんだけど？」

「ふむ、私も今回の例は初めてだ。聞いたことが無い。それに銃を使うサーヴァント……忌々しい」

何か銃使いで嫌な思い出でもあるのだろうか？

まあ、魔術師なら拳銃などは忌み嫌うか、と 凜は気にしなかった。

「脱落したマスターは？」

「今のところいないな。そのガンナーと呼ばれるサーヴァントを含めて8人だ。……イレギュラーではあるが、これによって質の良い聖杯になる事を願うだけだな。とりあえず……喜べ少年。君の願いは、ようやく叶う」

初めての戦闘から数日が経過していた。

他のサーヴァントにも出会わず、戦わずにいる者がいる。

サーヴァントのクラスで表すとイレギュラーな存在。

ガンナーである彼の名前はヴァッシュ・ザ・スタンピード。

彼のマスターであるバゼットは基本的に夜型だ。

ヴァッシュはどちらでも行けるのだが、

マスターがこうだと午前中、午後はほとんど動けない。……のだが。

ヴァッシュは真面目な顔をして誰に言うでもなく呟いた。

「いけない……ドーナッツ分が足りない。今行こう！　すぐ行こう！」

彼はアジトにしている洋館から一人出歩き始めた。

お昼の3時を過ぎたところだった。

彼は新都の方に向けて歩き始めた。

【ドーナッツ専門店：ミス・ドーナッツ】

若い女性店員さんは一人の男を接客している。本来、この店では客が商品を選び、カウンター越しに店員に注文し、持ち帰る。または食べていく。そう、これが本来のあり方だ。

女性店員が中々注文をしない男に声をかけたのが“本来”というものを覚えてしまったのか、この男が変わっていたのかと言うと、どちらもその通りと言えるかもしれない。

真っ赤なコートに金色の髪を逆立てて、オレンジ色のメガネをかけている。外国人かと思えば日本語は流暢に喋ることで、女性店員は安心して善意でカウンターから出て、横に付き、接客に……入ってしまった。

「お客様？ そろそろよろしいですか？」

「ちよ〜と待って下さいね。コレは！？ このピンクのソースがかかってるヤツ！」

「い、イチゴのチョコソースですね。粒々の……（誰か代わって……orz）」

「じゃあ、これも3つ！ コレは！？」

「ぼ、ポ。デリングですね〜大人気ですよ〜」

「じゃあコレは6つ！ 以上で！」

「かしこまりました〜ではお会計を……（ああやっと解放される！

「！」

「あ、揚げたてにしてね？ 作り置きはやダよ？」

「か、かしこまりました……（助けて〜！！）」

女性店員は最後の方になると笑顔にも苦難の色が入っていた。お買い上げありがとうございました。と言うよりも、お帰り頂きありがとうございました。という最後の笑顔は、その日一番の涙を流すほどの笑顔だったように思える。

そう、ヴァッシュはドーナッツに目が無い男だった。

彼は種類豊富な商品選びに1時間ほどを使い、更に揚げたてを頼んでいた。

見た事も無い様なデコレーションのドーナッツでは仕方が無いのかもしれない。

時刻は5時を回ったところだ。揚げたての大量のドーナッツの紙袋を腕に抱え、ヴァッシュは洋館に帰っている途中だった。マスターであるバゼットにも食べてもらおう。そう思っていたヴァッシュだが……。手摺に腰掛けて食べ始めた。

「せっかくの揚げたてだし。はぐっ！ ん〜！！ 激ウマ〜！！」

「お、お前は……！！」

「ほへ？ き、君は……！！」

ヴァッシュの目の前にいるのは数日前に死んだはずの衛宮士郎だった。

衛宮士郎は目の前の赤いコートの男に鮮烈なイメージを持っていた。昨夜、学園で見た拳銃を撃っていた男だ。金髪で真つ赤なコートの男。

そして、昨日は青い槍使いに一度殺され、なのに何故か生き延びていて、また襲ってきたランサーと言う男に　また殺されそうになった時、セイバーが現れた。

そして、遠坂凜に言われた事。監督者である言峰神父に言われた事。聖杯戦争。未だに信じられない事は多いけど、この左手に浮かぶ令呪と言う物がある以上、衛宮士郎も戦争に参加する者。他の参加者から殺される対象だと言う事だ。

目の前の男もランサーと戦っていた。

つまり、衛宮士郎のサーヴァントのセイバーと同義の存在。自分がマスターではないと言う事は、敵のサーヴァント。衛宮士郎はまた命の危機に陥っていると言う事だ。

しかし、目の前の男を見て、衛宮士郎は恐怖や畏怖は微塵も感じなかった。

何故なら……。

「生きてて良かったなあ〜！　辛かったよな、痛かったよな？　あ、食べるかい？　揚げたてだよ？」

何故か敵である衛宮士郎を前に涙していたのである。マジ泣きだ。

「あ、アンタ……俺を殺したりしないのか？」

「ひなひよ？」

口にドーナッツを運びながら、目の前のサーヴァントであるはずの男はしれつと言う。もしかすると、自分以上に聖杯戦争と言う物を理解していない男なのではないだろうか？ 衛宮士郎は目の前の男が心配になって来た。

「衛宮君どうした……の！？ あなた、ガンナー！」

「やあ、また会ったね。デートかい？」

「あ、遠坂、ガンナーって？ この前聞いた話だとサーヴァントのクラスつてのにガンナーなんてクラスは……」
「違うわよ！ それよりもガンナー、あなたに聞きたい事があったのよ」

衛宮士郎の会話はスルーされ、遠坂凜はガンナーの前に詰め寄った。

「僕って一応サーヴァントらしいんだけど、無闇に近寄って良いの？」

「あら？ 戦う気あるの？」

「ありません」

「なら良いじゃない。来なさい」

「お、おい遠坂」

連れて来られたのは衛宮邸。

「シロウ、帰ったのですね、凜も……っ!? シロウ下がって!」

「せ、セイバー!? 待ってください!」

「ほわあああゝ!! 美しいお嬢さん、僕と一緒にドーナッツについて語り合いませんか? アナタはドーナッツの穴が何故開いているか分かりますか? この穴は僕たちの愛で埋める穴。そう、ドーナッツの穴は僕たちの為に開いているのですよ!!」

ヴァッシュは目の前に現れた存在が自分と同じサーヴァントだと分かりながら口説き始めた。ドーナッツについて語ると言っていたはずが、いつの間にか“愛について”になって行く。

しかし、その何とも言えない空気を度外視すれば、驚くべきはその動きだった。セイバーのサーヴァントが臨戦態勢を取っていないとは言え、一瞬で距離を詰められ目の前にドーナッツを突き出されていたことだ。

もし、もしも仮にこれが武器であつたとしたら……。

「くっ! フザけているのですか!?!」

「セイバー待ってください! コイツは多分悪い奴じゃ……!」

「セイバーちゃんって言っのかゝ! 食べる?」

「敵の施しなど……! くっ! ……しかし食べ物に恨みは……!」
「せ、セイバー?」

「……僕には恨みあるの？ 初対面で？ あ、このポンディングつてのが激ウマでね」

しかし、このガンナーと言うサーヴァントの前では特に意味のない動きだったりする。

「し、シロウ……！ ……凜と同じ様に休戦協定を結んでください！ この敵は危険すぎる……！」

「と、言いつつ目が僕の紙袋にしか行っていないけど、誰を敵だと思ってるのかなセイバーちゃんは？」

「と、とりあえず、話を聞かせてくれないか？」

「こ、これは……！ 恐ろしい、何と言う食べ物だこれは……！」

セイバーはドーナッツを口に運んでは、コクコクと頷いたり、ドーナッツを睨みつけるように怪訝そうな顔を浮かべていたりしている。

「セイバーは放っておくとして……ガンナー、あなた名前はヴァッシュ・ザ・スタンピードって言うたわよね？」

「そだよ？」

「そだよって……確か、真名って教えちゃまずいんじゃないかったのか？」

ドーナッツを食べながらヴァッシュは答える。普通なら答えてはいけない事をだ。真名はその英霊の弱点を曝すことにもなる大事なモノだ。しかし、このヴァッシュにいたって言えば、問題は無かった

りもする。何故なら、バゼットも調べて諦めたのだが……。

「調べてみたのよ。でも、ヴァツシュ・ザ・スタンピード何て拳銃使い、どこにも出て来なかったのよ」

そう、彼の情報などどこにも存在しないのである。

「そ、そんなに有名じゃ無かったからね」

ヴァツシュは焦る様に自分を過小評価し始めた。しかし、それも覆される。

「嘘付かないことね。この前戦ったランサーのサーヴァントと互角、いえ、それ以上の実力だったんじゃないかしら？ アーチャーからも後で聞いたわ、全部槍を狙って撃ってたってね。殺そうとするなら急所を狙うでしょう？ なのに急所は狙わず、互角、更に最速のサーヴァントと言われるランサーを寄せ付けない敏捷さ、ちなみに知ってるだろうけどランサーのサーヴァントはね、大英雄のクー・フリーンよ？ 槍使いじゃ、右に出る者はいないんじゃないかしら？ それに、さっきセイバーの懐にも入ったわよね？」

「り、凜！ さっきのは油断していたからで……！！」

「あ、これも美味い。また行こうつと」 ポイントも溜まる溜まる」

「聞きなさいよ！！ 聞いた事も無い、調べても出て来ない。ヴァツシュって名前は偽名なのかしら？」

「それ以外に名前なんて無いな」

「嘘付いてるわけじゃなさそうね……じゃあ、アンタの過去を教えなさいよ」

「……知っても、楽しい事なんて何もないよ」

急に真面目なトーンになるヴァツシュの声に、居間は突然重苦しくなった。

「わ、悪いサーヴァントじゃないんだろ？　ならガンナーも俺達と休戦協定を結ばないか？」

「衛宮君バカ？　マスターもいないのに結ぶわけないじゃ……」
「よろしくお願いします！！」

「おい」

「いやー、戦争だなんてやつても何も得られないって。マスターもきつと分かってくれるさ、おっともこんな時間が、マスターに怒られちゃう、じゃあ僕はこれで……」

ガシッ

いきなりセイバーに掴まれるヴァツシュの左腕、その腕にはまだドーナッツの残る紙袋が抱えられている。セイバーの目は臨戦態勢の目そのものだった。

「……え？」

「ガンナー、それは休戦協定を結んだ記念に置いて行くと良い」

「いっぱい食べてませんでした！？　マスターの分が……」

「だ、駄目だと言うのですか！？」

「……置いていきます」

「本当にサーヴァントなのかしら？」

「悪い奴じゃなくて良かったじゃないか」

「彼は信頼に置けます」

セイバーはドーナッツを片手にキラキラした目で見送っていた。

「それで？ 何をしていたんですか？ ガンナー？」

「え、えーと敵情視察を！ いやー敵の本拠地まで行つて来たんですかね！？ かなり多くのサーヴァントに囲まれてまして！！ 僕以外にワーカーとか、プーアーとか召喚されていましてね！？」

「どのワーキングプアですか！！ それに口元に食べカスが付いてます！」

「噓！？」

「……嘘です。さあ、どこで何をしてきたんですか？ ガンナー？」

ヴァツシュは黒い革の手袋を嵌めて詰め寄ってくるマスターに悲痛の叫びを上げていた。

「なるほど、許容範囲を超えてますが……あの時のアーチャーのマスターの女子学生と、死んだはずの男子学生と一緒にお茶をしていたと……。あの子はマスターになっていたのね……イレギュラーか

しら？ イレギュラーならイレギュラー同士でガンナーを引き当てれば良いものを……。他に情報は？ セイバーだったんですね？ 実力は？」

「すんごい美人」

「いえ、そうでなくて。聞いても無駄かもしれませんが、戦わなかったんですか？」

「戦いましたとも！ 僕の理性と彼女の美貌！ どちらが勝つかのせめぎ合い！！ 僕は何とか勝利する事が出来……！！」

「戦わなかったんですね？ 全く……他には？ 話して何か情報は得られたんですか？」

「休戦協定を結んできました！！」

「……な、何を勝手な事をしているんですか！！」
「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

振り下ろされる拳にヴァッシュは謝り続けた。

「でも良い子達だったよ。死なせたくないな……」
「……ふう、全く……私は一度死んだ身ですから、聖杯は手に入れたらラッキー程度に思いますよ。言峰綺礼も何か企んでるようですしね」

「ありがとうマスター」

「それで？」

「はい？」

「何を食べたんですか？ 私には？」

「……マスター！ こうしてはいられない！ 偵察しましょう！！
街ではどんなサーヴァントが暴れているやもしれない！！」

「これは？ ポイントカード？」

「いつの間に……！！？」

「ドーナツですか……ドーナツ好きのサーヴァントなんて聞いたことがありません！！」

「ごめんなさい！ごめんなさい！」

第03話 「休戦協定」(後書き)

感想は随時受付中

結構うる覚えで書いてます。

「ここが違う!!」等の激しい突っ込みはスルーします。

第04話 「理想を抱いて……」 (前書き)

不定期不定期。

慌てない慌てない。一休み一休み。

第04話 「理想を抱いて……」

衛宮の家。

少し古めに映るが、立派な日本家屋を思わせ、更に広い。そんなところにやって来たのは赤いコートの金髪の男とスーツ姿の女だった。

「や、ども」

「ガンナー、あなたでしたか。今日は何を持って来てくれたのですか？ またどーなっつですか？」

「いや、セイバーちゃん。僕の隣にいる人見えない？ 普通気付くのか？ うちが先だよ？」

「あなたがセイバーですか。私はこのガンナーのマスターのバゼットです。あなたのマスターはいますか？」

「シロウなら学校です」

「なっ！？ マスターともあろう者が学校に通い続けているのですか！？」

「はい。私も進言はしたのですが、逆に敵が『裏があるやも』と考え、まず手出しはしないと言う事でその様に……」

「一理ありますね……では中で待たせて頂いても？」

「私にそのような権限は……」

「ちなみに今日のお土産は前回の3倍のドーナッツ」

「どうぞ中で話しましょう」

「……これが本当にサーヴァント……？」

ヴァッシュは次々に消えていくドーナッツを見ながらお茶を用意していた。

「よく勝手が分かりますねガンナー。湯飲みや茶葉がある場所まで」
「凄く綺麗に整頓されていたからね」。あ、僕の分残しておいてよ？」

「なっ！ ガンナー、あなたは自分で持参した手土産を食べると言うのですか！？ これは既に私のです！ どうしてもと言うのであれば……」

セイバーはもう滅茶苦茶な事を言いだした。

立ち上がり重心を前に置き、今にも騎士甲冑を身に纏いそうな勢いだ。

しかし、ヴァッシュは両手を顔の横にまで上げて首を横に振った。
ソレを見てセイバーは満足げにドーナッツに貪り付いた。

しばらくして、家主の衛宮士郎。

そして、既にここに下宿していると言う遠坂凜が帰って来た。

「ただいま……っとガンナー！ それから……どちら様？」

「あなたが衛宮士郎。セイバーのマスターですか？ 私はこのガンナーのマスターで、バゼット・フラガ・マクレミッツと言います。」

以後よろしくお願いします」

「ああ、ガンナーの……どうも」

「あら？ 甘い香り……ああ、ガンナーじゃない。そちらがマスター？」

「バゼット・フラガ・マクレミッツです。あなたは？」

「私はアーチャーのマスターの遠坂凜よ」

「遠坂……なるほど。では、休戦協定についてお話を……」

「ああ、そうだな」

「まず、私達の情報から行くわね？ この聖杯戦争で一番厄介そうなのはバーサーカーのサーヴァント。英霊【ヘラクレス】よ」

「ほう、真名まで判明しているのですか」

「と言うか、相手のマスターが言ってきたのよ。それだけの自信があると言うことね。それに魔力もかなり余裕があるほど。バーサーカーを使役するのも問題ないみたいだから自滅は期待できない。ちなみにマスターはイリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

「アインツベルンがバーサーカーを……なるほど」

「一度戦ったけど、シロウが死にかけたわ」

「それにしては……怪我など無い様に見えますが？」

「私にもよく分からないんだけどね。セイバーから治癒の魔力が流れ込んでる可能性が考えられるの。シロウは逆に未熟だからセイバーに魔力供給することが出来ないけど」

「正規のマスターではないのですね。なるほど。では、私からは2点です知っているかと思いますが、ランサーはケルトの英雄【クー・フーリン】です。そして、私はその元マスターです」

「元……マスター？ アンタはガンナーのマスターじゃないのか？」
「前に言ってた事は本当なのね？ 言峰綺礼がランサーのマスターだって」

「ええ。言峰は私の腕を切り落とし、令呪の移植をしたかと思われる」

「言峰、アイツ……そんな事を！」

「でも私達が気付いてるって事は、まだ知らないはずよ……時間の問題でしょうけどね」

「ああ、僕のドーナッツがあ……」

「ふう、御馳走様でした。ガンナー」

ヴァッシュの持ってきたドーナッツは全てセイバーの胃袋の中へと消えていった。マスターたちが真面目に聖杯戦争について話している中、サーヴァントの2人はそれぞれ満足気な顔と、項垂れる顔を見せていた。

「……コホンッ。このガンナーは……私にも不可解ですが、イレギュラーな召喚だったのでしょうか。【ヴァッシュ・ザ・スタンピード】この名前に偽りはないと、マスターとしてのリンクで分かりますが、聞いたことのない名前です。調べても何も出て来ない」

ヴァッシュは体育座りをして、指をの字になぞらせている。

「で、でも悪い奴じゃないんだろ？」

「そんな事は見りゃわかるわよ……はあ、じゃあまず最初に叩く敵を決めましょう。バーサーカーは避けたいわね。ライダーかアサシンかキヤスターか……でも私達も会った事があるのは、ライダーだけ。シロウが会ったんだけどね」

「私を呼ばなかった時ですね？ 学校で襲われたという……シロウ、やはり私も学校に連れて行くべきだ！」

「女の子に戦わせられるか！ 何度も言わせるなよ」

「シロウ！ いい加減に私を侮辱するのは……」

ガシッ

と、掴まれたのはシロウの肩だった。

「そう！ 戦うなんて良くない！ 怪我したらいたいもん！ 誰とも戦わなくて良いと思います！！」

「ガンナー……少し黙っていなさい」

黒い革手袋をギュギュツと鳴らしバゼットは手に嵌めた。
立ち上がり足を運ぶのは金髪の男に向けたものだった。

「ごめんなさいごめんなさい！」

「……あれは本当にサーヴァントなのかしら……？」

「サーヴァントに生身の人間がマウント取ってるぞ……人間がサーヴァントに勝つなんて無理じゃなかったのか？」

「あんなに易々と上を取らせるとは……何を考えているのだガンナーは？」

「あゝ落ち着いたかな？」

「ええ、失礼しました。では攻撃対象はどうしますか？」

「ライダーか、アサシンか、キャスターか。
シロウの話だとキャスターは柳洞寺に陣取ってるらしいわね」

「ライダーから聞いたんだ。魔女がいるって」

「魔女か…… 士郎君。ライダーと言うのは…… どんな奴だった？」

ヴァッシュの顔が真面目になる。

周りの空気もつられるように引き締まる。

「え、えつと背が高く、髪が凄く長くて、えつと膝裏以上は長かったと思うな。それで、女で武器は……」

「顔は？」

「いや、マスクをしてて分からなかった。アイマスクって言うか、目隠しと言うか……」

「ガンナーどうしたんです？ ライダーと知り合いとか言うんじゃないでしょうね？」

「マスター。ライダーとキャスターは、
とりあえず僕に任せてくれないか？ 会って話したい」

「どうしたんだ？ 凄い真面目な顔になって」

「戦いたくないとか。ラブ&ピースとか言わないのね」

「だって綺麗な女性だとしたら会ってみたいじゃないか!!」

「……シロウ。お腹が空きました」

夕日に染まる居間。そこには静寂がうまれていた。

「……ガンナー。寝ていなさい」

ギュギュッ

「ごめんなさいごめんなさい!!」

そして、すぐさま喧騒を取り戻した。

ガラララア〜!

「たっだいま〜!! さあ、桜ちゃんも入って入って〜」
「はい」

「おかえりなさい藤村先生」
「おかえり藤ねえ、桜も」

「ただいま〜今日は何かな〜。おお〜揚げだし豆腐か〜!」

居間に勢いよくやって来た藤村大河の目の前には、セイバーが正座して晩御飯を今か今かと待っている。そして、見慣れない赤いコートの金髪の男と、スーツ姿の女が目に入った。

「僕のドーナッツは……」
「いつまでいじけているんですか……全く」

「って誰だー!!? シロウ? 遠坂さんは家を改装中で、セイバーちゃんは切嗣さんの外国の知り合いで……今度は何だー!!!?」
「お、落ち着け藤ねえ!」

「これは申し遅れました。私はバゼット・フラガ・マクレミッツです。実は少し離れたところにある洋館で、改築後に住む予定だったのですが、改築が進んでおらず、こちらの士郎君に助けて頂いたのです」

「まゝた人間を拾って来たの！？ シロウらしいけど、いい加減にしないと、無料ホテルとか言う噂が立って、ホームレスも集まってくるわよ!？」

「そ、それがだな藤ねえ……」

トンッ

机の上に置かれたのは通称【一本】
帯付きの100枚束の1万円だった。

「生活費は入れさせて頂きますので、どうか」

「な、な、な……そ、そんなお金で解決するなんて人は認めないんだからー!! その金髪を逆立てた人もピアスしてるし学生のシロウと一緒に暮らすのは不健……ぜ……ん」

「僕？ そこを何とか。何にも悪いことしないよ？ お願いプリーズ」

「い、いや、でもまあそこまで言うなら……そりゃあ困ってるみたいだし？ 部屋も空いてるし……な、名前は何て言うの？」

「ヴァッシュ・ザ・スタンピードですけど……?」

「ヴァッシュさん……あ、揚げだし豆腐如何ですか？ 私が腕によりをかけて作ったの……」

「おい藤ねえ。帰って来たばかりだし、それ作ったのは俺……ガッ」

竹刀で叩かれる士郎を見ながら、本名を名乗ったヴァッシュは汗を

「筋垂らしながら」「い、いただきます」と言った。

「シロウ、あの程度の攻撃を避ける事も出来ないとは、やはり私も学校に……」

「今はその話をするな……あーもう！ 飯だ飯！！」

「あ、私食器出しますね！」

「へー砂漠の荒野から来たんですか。ガンマンみたいですねー！」
「みたいじゃなくてガンマンなの！」

「あははははははー面白い人ですねヴァッシュさんてー」

酒が入った藤村大河は隣の赤いコートに寄りかかる様に飲んでいる。反対側の席ではバゼットが隣にいる大食いに何気ない質問をしていた。

「セイバーはよく食べるんですね？」

「シロウのご飯は美味しい。それに魔力供給が無い以上、他で補えるものは補わなければ守るものも守れない」

「なるほど、確かに供給が無いとなると、

サーヴァントとしても厳しいですね。しかしセイバー」

「何でしょうか？ メイガス」

「この家の供給は間に合うのでしょうか？」

「この家の？ どういう事ですか？」

バゼットは家主の衛宮士郎に視線を投げて続けた。

士郎は食後のお茶を飲みながら、家計簿を睨みつけていた。

「タダで料理が出てきているとても思っているのですか？」

「そんな事は当然思っています。」

シロウはそのためバイトと言うものをしているのですから」

自信満々に答えるセイバー。

しかし、桜も凜も士郎を不憫そうに見つめている。

「セイバー……良いですか？ 学生のアルバイトと言うモノは、あなたの食費を賄えるほど賃金は高くありません。士郎君を見ると良い。辛そうでしょう？」

「シロウは食後になるといつもあの様な顔をしていますか？」

「働かざるもの食うべからずという言葉があります。アレだけ食べて、いえ、今も食べ続けて食費を入れないとは何事ですか？ 鬼ですかあなたは！」

「なっ！ あなたにそのような事を言われる筋合いはない！ あなただってご飯を食べたではないですか！」

「あなたの目は節穴ですか！？ 私は食費を生活費としてお渡ししています」

その言葉に士郎は思い出したようにパアツと明るい表情になり、先ほど手に入れた100万円を戸棚から取り出し家計簿の修正を始めた。

「むっ！ メイガスごらんなさい！ シロウは幸せそうな顔をして

いるではないですか!!」

「ですから! あなたの目は節穴ですか!？」

また対面側。

「何だか一気に賑やかになったわね……」

「遠坂先輩。ヴァッシュさんとバゼットさんも先輩の家に住むんですか？」

「そうね。改築とか言うのが1カ月弱かかるらしいから、最低でも2週間はいるんじゃないかしら? あ、私も同じぐらいになるかな」
「そうなんですか……あ、藤村先生。飲み過ぎですよ」
「あゝもう! 桜ちゃんは優しいな。士郎のお嫁さんになればいいのに」

「わ、私が先輩の……!？」

「なに真に受けてるのよ? あら? ガンナーは?」

「ああ、さっき外に出て行ったぞ? 夜風に当たってくるとかで」

衛宮邸の屋根。

屋根には誰もいない。様に見える。
しかし、霊体化している者がいる。

遠坂凜のサーヴァントのアーチャーだ。

「よつと……あ、いたいた〜」

「貴様が……」

霊体化していても同じサーヴァント同士なら、その姿は見えてしまう。

よじ登って来たのはアーチャーと少し被る赤いコートに身を包むガンナーだった。

「お酒は？」

「飲まん」

「……あ、そ」

会話が無く、ヴァッシュは酒を飲み始めた。

グラスに液体を注ぐ音と、風の音、

瓶の蓋を閉める音、液体を喉に通す音が聞こえる。

その沈黙とも言えるモノを破ったのは直立不動のアーチャーだった。

「……貴様は何が目的なんだ？ 本気で誰も殺さない気か？」

そう、サーヴァントである以上、戦うのが目的になる。

しかし、横で酒を飲む男が「戦う」と言ったところを見た事がない。

「だって……誰も死にたく無いじゃん？」

「ふんっ。偽善か……」

反吐が出る。そう言わんばかりにアーチャーは鼻を鳴らす。

「ん〜でも。君も同じような考え持つてるでしょ？」

「私が？ ふんっ。私は凜の命令に従うだけだ。凜が戦わないと言えに従うが、アレも魔術師だ。聖杯を取りに行くだろう。休戦協定が解ければ真っ先に仕留めに行くぞ」

「士郎君と同じ匂いがすると思うんだけどなあ……あ、怒った？」

「……生憎と私はあのような理想は持っていない。一つ聞いておこう。貴様はイレギュラーかつ、それなりの力を持ったサーヴァントのようだ。しかし、誰も殺さずにこの聖杯戦争を終わらせられると言うのか？」

「生き方は変えられないからね〜。あ、もう空だ……」

「大方、どこぞの小僧と同じように誰も傷つけず、全てを背負いこみ自分が犠牲に傷付けば良いとも思ってるのか。貴様の様な奴にはあの小僧がマスターであつた方が幸せだっただろうな？ 貴様等はおめでたい連中だ。無意味な理想はいずれ現実の前に敗れるだろう。それでも振り返らず、その理想を追って行けるか？」

「まあ何とかなるよ。出来そうなら力貸してよね？」

「ふんっ勝手に……」

「あ、それから！」

「……なんだ？」

「そろそろ服装被らないようにしてよね！」

「……」

「ガンナー、どこですかー？」

「あ、マスター？ 上です〜。今おります〜……あ、ノ〜〜〜！！！」

踏み外すようにヴァツシュは屋根から落ちた。

「あいたたたた……ん？」

「ガンナー……どこを触っているんですか!!」

「ごめんなさいごめんなさい!!」

屋根に残るサーヴァントは下に落ちたサーヴァントと、それに跨り拳を振り下ろすそのマスターを見て溜め息をついた。

「……溺死してしまえ」

第04話 「理想を抱いて……」 (後書き)

感想は随時受付中。

さて、これからどうするか……。キヤスター狙うかな……。いつその
事バーサーカー行くか？ いや、でもライダーも捨てがたいな。

……どうする？ (アンケートの振りw)

第05話 「犠牲者は拉致されて……」 (前書き)

久しぶりだね〜待った？

そっか……いいさ、いいさ。好きで書いてるだけだもの。だって人間じゃない。

byみつを

と、間違えつつ わけの分からないことを言いつつ今回のお話しは、【あの人】を利用して、【あの人】を攫ってしまおう！ ってお話し。

シリアス少な目、ギャグ大目、謎が浮かび上がるが、また次回！
ではでは、5話いつてみよ〜。

第05話 「犠牲者は拉致されて……」

（愛と平和のために戦う戦士。人は僕を愛の狩人と呼ぶ。

狙った獲物は外した事が無い。それが女性のハートだとしてもね）

「^{ばん} B A N G ♪」

「何してるんですかガンナー。行きますよ？」

衛宮邸玄関。

そこにはセイバー・アーチャー・ガンナーの3名とそのマスター達3人がいた。

話し合った結果。キャスターのサーヴァントの住処となっている柳洞寺を攻める事にしたのだ。理由は単純明快。キャスターによる街への被害が大きいからである。

衛宮の友人である寺の息子、柳洞一成の話によると、最近になって女性が居候として住んでいると言う事らしく……。

「僕だけで良いと思うんですけど」

「ガンナー話を聞いていましたか？ 最弱といわれるキャスターのサーヴァントと、油断して呆気なく退場ということもあり得ます。心してかかりなさい。……それとも、まだ相手が女性だと言う事で舞い上がっているのではないでしょうね？」

「さあ！ みんな気を引き締めて行こう！ 敵は柳洞寺にあるいゝ
！！」

「「「「「はあ……………」」」」」

気を取り戻すように皆一様に集中して夜の街を歩く。一人を除いて。

「ゝゝゝゝゝ」

「…………ガンナー、戦わないと言うならば今の内に帰るべきだと思う
が？ 窮地に陥ろうとも手助けはせんぞ？」

アーチャーが口を開く。マスターの許可なく発言するタイプでは無い
彼が言った事は、多かれ少なかれ、その場の者達が思っている事
ではあった。

「別に良いよ。その時は凜ちゃんに助けを呼ぶもん」

「わ、私が助けるの…………？」

「サーヴァントがマスターに、しかも他のマスターに助けを呼ぶとはどういう事ですか?」

皮の軋む音がヴァッシュの後頭部に広がる。

「じよ、冗談ですう……つと、ここが入り口?」

「ああ、柳洞寺だ」

口数少なく登って行く6名。

そして、山門が見えたその時 セイバーがいち早く気配を察知し跳んだ。

「セイバー!?!」

ガキンッ!

「ほう……挨拶も無しにいきなり斬り付けてくるとは……セイバーのサーヴァントとは、無粋な様だな」

「お前は?」

「アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」

「……っ!」「」「」

「真名、言ってるじゃん! 言っちゃ駄目なんじゃないのマスター!?!」

「くっ！ 参りました……名乗られたからには、こちら名乗り返すのが騎士の礼です。小次郎と言いましたね。アサシンのサーヴァント。私は……」

「よい、名乗れば名乗り返さねばならぬ相手だったとは……いや無粋な真似をしたのは私であつた。真名なぞ知らずともよい。我等にとつて敵を知るのはこの刀で十分。そうは思わんか？ セイバーのサーヴァント」

「ストップ！ ストップ！ 僕はね、話し合いに来ただけなの。戦いに来たんじゃないの！ という訳で、何でアサシンの君がここにいるか分からないけど、用があるのはこの奥だから……通してくれない？」

ガンナーは大きく手を振って割って入る。

「ガンナー！ ふざけるのもいい加減にして下さい！ 私達は戦いに……！」

「貴様が……あの女狐の言っていた不確定な存在とは……サーヴァントが戦う気がないとは……。正直、恥曝しも良い所だと思わんか？」

「くっ！ 返す言葉もありません」

「マスター！？ ちょっと！ 君の所為で僕の好感度が落ちてるじゃないか……！」

「……（何を今更）」「……」

バゼットは、ガンナーに憐れみの目を送りながら、アサシンの言った言葉に疑問を持った。

「ですが……『女狐』というのは、キャスターの事ですかアサシン。あなた達も協力関係になると？」

「協力？ いいや、あの女狐は私を使役しているのだよ。私はもうココを離れる事も出来ん。『ここから先へサーヴァントは通すな』これが私の仕事だ」

「どんな理由があるか知りませんが、ここは私に任せて先へ行ってください。……ガンナーも！ 何をいじけてるんですか！」

「了解した。行くぞ凜」

「分かってるわよ！」

「シロウ君。ここは任せました」

「危なくなったら呼ぶんだよ？」

「危なくなってもあなたは呼びません」

「ま、まあ何とかするさ」

シロウは自分の家から持ってきた竹刀を強化して4人の背を見送った。

山門を抜けるとキャスターが既に戦っている。

キャスターは骨の兵士を何体も使い、時間を稼ぎ、相手の消耗を待っている。

戦っている相手は……

「ほああああ！ キャスターさんにライダーさんだああ！！ 僕も仲間に入れ……！」

「ガンナー、あの二人が楽しそうに遊んでいる様に見えるんですか？」

アーチャーは鼻で笑い、凜は額に手を置き 溜め息をついている。

「あらあら、こんなところまで入ってきて、今日はお客さんが多いわね。まとめて相手するのは少し大変かしらね……」

「僕にお任せを！ 僕は愛の狩人ヴァツシュ・ザ・スタンピード。あなたのお力にならせて下さい！ さあ、こちらの御婦人を虐める方々！！ どこからでもかかってきなさい！！」

「ガンナーいつの間に寝返ったんですか……！」

「ふふふ……良い子ね。ポチ、ではあのライダーから始末なさい」

「キャスターも少しココが弱いのかしら？ そんな言う事なんてガンナーが聞くわけ無いじゃない」

「そうだな、それには肯定しかできない上に、仮にも同じサーヴァントとして心外且つ嘆かわしい。しかしだ 凜。この場合、頭が弱いのは君だと言う事になる」

「何だよ！？」

「ワンっ！ 御主人様っ♪」

「見ての通り、アレが言う事を聞いてしまう戯けだからだ」

ガクッ！

ライダーはマスターから、衛宮士郎達がアサシンを相手にしているドサクサに紛れて寺に入りキャスターを始末する命を受けていた。

目の前には骨の兵士。その相手が終わると、赤いコートの二人が目

に付く。一人は金髪でキャスターの僕みたいな犬だ。もう一人は双剣を手に入れている白髪の男だ。

「ガンナー！ いい加減にしなさい！！」

「アーチャー……こんなくだらない所で死なないでよ？」

「ああ、分かっているさ」

とりあえず、犬は噂のイレギュラーであるガンナー。

そして、今のところコチラに攻撃の意思はないアーチャーと、そのマスター。

ライダーは感情を表に出さないサーヴァントらしいサーヴァントだが、これには鼻で笑った。

「ふっ……ガンナーとは誰にでも尻尾を振るサーヴァントなんですか？ つ！？」

しかし、ライダーが気付いた時にはいつの間にか銃口を向けられている。

ドンッ！

しかし、ライダーは余裕を持ってかわしている。銃口を向けられてから間があった様にも感じたが、ライダーはその間を利用してガンナーのコートのボタンを二つ取っていた。

「……それぐらいの早さならば……私が本気でしたらあなたは2度死んでいましたよ？」

言葉と同時にボタンを地面に落とすライダー。

ソレと自分のコートを確認してガンナーは真剣な面持ちで答えた。

「僕がその気なら君は5回……乳を揉まれていた」

顔を緩ませ、手をワキワキとするガンナー、するとライダーの服の胸元に切れ目が入った。ガンナーもライダーと交錯する中で彼なりの攻撃をしていたようだ。

「くっ！ ランサーを退けていたのは本当でしたか！」

最速のサーヴァントであるランサー。それを退けたにしては遅すぎると思った矢先のことだ。ライダーは気持ちを切り替え、目の前のガンナーにダガーを構える。

「真面目に戦いなさいガンナー！ ソレが出来てどうしてあなたは……！！」

「隙ありねライダー」

サクッ

キャスターによる突然の後方からの刃物に刺され、

ダメージを負うライダーはバックステップで距離を取る。

しかし、致命傷では無い。

「ぐっ！？ な、何を！？ その様な小さな刃では……！」

「あら？ でもあなたのマスターとの契約は無に帰したわよ？」

「ループレイカー破戒すべき全ての符……ギリシャ神話 『裏切りの魔女メディア』」

か！」

バゼットはその効果の宝具から、すぐに所有者であるキャスターの真名を弾きだした。

「御主人様、これでライダーちゃんは自由の身なんですね。」

「ええそうよポチ。あなたもあの怖いマスターから解放してあげるわね。」

「ガンナー！ アンタ本気で裏切るつもり！？」

「が、ガンナー！ いつまでキャスターの犬をやっているんですか！！」

「今、終わりましたよマスター」

ドンッ！

バキィイインッ！

ヴァッシュの銃弾はキャスターの物理障壁に阻まれた。

「ポチ、どういう事かしら？」

「ごめんなさい。人妻の香りがするんでパスします！ では失礼して……！」

「な、何ですか！？ ちょっと！？ 放しなさい！」

ガンナーに担がれて暴れているのはライダーだ。

「マスター撤退を！」

「え、しかし……もうっ！ 分かりました!!」

「ライダーを攫うって……何考えてるのかしらアイツ……」

「今までの奴の行動を見る限り明白だが……まさかな？」

キキンッ！

「セイバー！」

「シロウ下がって！」

「2匹の燕を捉えるのは一苦労だな……いや、一匹は名も無い鳥か」
アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎の燕返しをかわしたのは幸運だった。足場が揃っていればセイバーの鎧、または衛宮士郎の首は胴体と離れていたかもしれない。

多重次元屈折現象。全く異なる軌跡を描く三つの斬撃を、文字通り

全く同時に繰り出すというものを目の当たりにし、セイバーは一種の感動すら覚えていた。宝具を持たずに宝具の域にまで達した修練の化身。目の前にいるサーヴァントはこれほどまでに騎士道を弁え、撃ち合ってくれる。

しかし、その感動は儚くも崩れ去った。
崩れ去るとは言葉通り、上から下へという現象だ。

「おおおおおおああ~~~~~!! これは大変ですよ~~~~!
!?!」

叫び声を聞いたセイバーは上を見上げ、声の主に聞き返す。

「どうしたのです!? ガン……ナー……?」

「大変なのは俺なんです~~~~~!!」

バランスを崩しながらガンナーは目隠しをしたサーヴァント……キヤスターには見えないため、恐らくライダーであろう人物を懷に抱え、山門から飛び出してきた。後ろから続く、バゼットや凜とアーチャーは普通に階段を駆け下りてくる。

しかし、ガンナーは横に反れ、階段脇の溝の段に平行に足を乗せ、さながらスケートボードや、スノーボードと言った様子で勢いよく下って行く。良く見るとガンナーの靴底は金属製の様で、これが良く滑る様だ。

「のおおおおおお~~~~~!」

「バランス! バランスを取ってください! この下手くさ~~~~~」

「!!」

騒いで下りて行くガンナーとライダー。

ライダーがライドしているのは波に乗り切れない余程の暴れ馬のようだ。

「ちっ 邪魔が入ったか……行くがいいセイバー。私はここを動けん、また相見えようぞ……む？ ふっ……またな」

カッコよく再会の口上を述べるアサシンだが、セイバーはガンナーの騎乗スキルを見送っていた。

バゼットはアサシンに頭を下げた。

「アサシン、お邪魔しました。出来れば今度はガンナーは置いて来ようかと思います」

「出来ぬ事は無理にせんで良い……が、健闘を祈りたいな」

何故か戦おうともせずにバゼット達は下り、アサシンは登って行く。

「で？ コレどうするのよ？」

遠坂凜は頭を抱えて目の前のアイマスクをしている髪の長い女性を見ている。

「私のマスターとの契約は間違いなく切れています。もう私には戦う理由もありませんから、消えるのを待つのみです」

シレッと答えるライダーは、隣の視線を意図も介さずに無視している。

「ライダーちゃんか、綺麗な髪だね。あ、お茶飲む？ ドーナッツは好き？」

「ガンナー！ それは私のドーナッツでは無いのですか！？」

「いや、僕が買ってきたものだし……」

「そんなバカな！ あなたが買ってきたドーナッツは毎回私が食べているじゃないですか！」

などと、平和かつどーしよーもない良い争い（争いにすらなっていない）をしているガンナーとセイバーを眺めながら、この家の主は計算をしていた。

「サーヴァントが4人、マスターが3人、藤ねえと桜で9人か……
食費がな……バゼットさんのアレだけで足りると良いんだけど……」

「士郎君!? ライダーも住まわせる気ですか!？」

「え? そりゃあ、ガンナーが連れて来たんだから……違うのか？」

「私は屋根で警備をしている。好きにしてくれ」

「あ、アーチャー!?! くっ逃げたわね! ったく……でもマスター
ーがいないんじゃないかねえ……」

ライダーは先ほどから飛び交う会話に疑問を持ち、目の前でお茶を
飲んでいる警戒心ゼロな人達に聞くが……。

「私をどうする気なんですかあなた達は？」

「……ガンナーに聞いて(くれ)(ください)(よ)」
「」

「……それは困りました」

「え!?! 僕には聞いてくれないの!?!」

ガンナーは眼を輝かせて今にも涙を流しそうだ。
何ともメンドクサイ男である。

「……この世から消える最後に疑問を抱えるとは……」

「まあそう言わずに、僕のマスターと契約すればいいんだよ」

「……はあ!?」「……」

「……それはどういう事でしょうか？ 意味が分かりません ガンナーのサーヴァント。自分のマスターを魔力切れで潰すつもりですか？ 令呪も無いですし……」

ヴァッシュは戸棚から隠し持っていたドーナッツをテーブルに広げて食べ始めた。

「んほへ？ まふはーはほふとへいやふ……」

コッソッ

と、ガンナーは手の甲で軽くバゼットに叩かれた。

「食べながら話さないでくださいガンナー」

「……（ゴクリ）失礼。あのね、マスターは僕と契約してるけど令呪とかは無いからマスターに負荷とかあまり掛かってないみたいなんだよね。だから、マスターとライダーちゃんが契約すれば大丈夫なのさ……（モグモグ）あ、ほれも美味しいネ……（モグモグ）」

「私も頂きます（パクパク……モグモグ……）」

セイバーもドーナッツへと武力介入を始めた。

そして、ライダーを含む冷静な人達は少し疑問に思い、分析し、叫びをあげた。

「「「「……はあああああっ!?!」「」「」

第05話 「犠牲者は拉致されて……」 (後書き)

感想は随時受付中

ガンナーは契約してるけど令呪がない？

令呪があると勘違いしていたバゼットさんの運命やいかに！？

今週の【ゴールデンハンマー轟！】はここまで！

次回も絶対見てくれよな？

今回は敵の幹部【アグラニャーテ】について研究していくぞ！

では次回も！ ゴールデンバット♪

……おつと間違えた。

次回は 今回の謎と、ライダーさんと、増えるワカメについて考察していくぞ！

じゃあまた不定期でいつになるか分からないけどよろしくね

第06話 「衛宮邸に増えて行く人々」(前書き)

1か月放置！

すまんね！ あいやしばらく！！

前回までのおさらい。

ライダーがキャスターのルールブレイカーで契約破棄されたところを拉致して来て、衛宮の家に連れ帰りました。それで、マスターどうする？ って話しのところで、ヴァッシュは自分のマスターなら誰とも契約してないから良いんじゃない？ と言いだした。

さて、ガンナーってじゃあ何なのよ？

第06話 「衛宮邸に増えて行く人々」

「ちょっと待ちなさいよ！ サーヴァントじゃないッて言うの!？」

凜はガンナーの胸倉を掴んで足を卓袱台に乗っけている。

「おわあああ！ 違う違う！ サーヴァントで、マスターと契約してるよ？ してるんだけど、どういう訳か、令呪とかマスターの負担になる様な事はほとんど無いから」

そう、バゼットにヴァッシュを使役する絶対命令権である令呪は無い。

「バゼット、それは本当なのか？」

家主の衛宮士郎は困惑しながらガンナーのマスターに問う。
そして、帰ってきた答えは肯定だった。

「私もおかしいとは思っていたのです。パスは繋がっていて魔力も多少は供給しているのに、多くを必要とせず、それでいて……令呪がない事に」

「どうなってるのよ……」

遠坂凜はお茶を一口飲み再び考え始める。

「ガンナーおかわりは無いのですか？」

「無いよ、食べちゃったじゃん……」

空になったドーナッツの入っていた箱を折りたたみ、ガンナーは溜め息をついた。

「あの、もしも私を契約させると言うのでしたら、希望したい人物がいます」

今まで諦めムードだったライダーが遂に口を開いた。

「どう言う事？ 前のマスターと再契約したいって事？」

「いえ、ちょうど仮のマスターがウザかつ……本来のマスターに戻せるいい機会かと思えますので」

「今、何か凄く黒いモノが見えた気がするけど……ライダーちゃんの本来のマスターって？」

「慎二がマスターじゃなかったのか！？」

衛宮士郎はガンナーを遮り驚く。

それもそのはず、つい先ほどまでは衛宮士郎・遠坂凜の中ではライダーのマスターイコール間桐慎二だったからだ。

「ま、待って……嘘でしょ？ もしかしてマスターって……桜？」

「え？ お、おい嘘だろ？」

「ほへ？ 桜ちゃん？」

凜は顔を青くする。士郎は信じる以前に飲みこみ切れていない。

ガンナーはお茶を片手に夕飯を作りに来てくれる娘だと理解した。

「なるほど、昨日の彼女は間桐の人間でしたか」

バゼットも令呪の事はどうでもよくなったのか、頭を切り替えた。

静寂が居間を支配する。

「良いんじゃないの？」

「ガンナー、私達が口出しして良い事ではありません」

「ちよつちよつと待って！ 大丈夫だってマスター。確かに桜ちゃんにはマスターっぽくないけど、戦わせるためじゃなくて、ライダーちゃんと仲良く平和にしてもらえるように契約するだけだって。ね？ 何もそんな真剣に悩む必要なんて無いって。ほらライダーちゃんも桜ちゃんと一緒にいたいみたいだし」

ガンナーは両手を上げたまま殴りかからんとするバゼットを止める。

「これは聖杯戦争なんですよ！？ いい加減に真面目に戦わないと多くの死者が出てしまつんですよ！？ ガンナー！」

バゼットは普段からのヴァッシュのサーヴァントとしての姿勢を正そうと説得を試みるが、イレギュラーな彼を縛る事が出来るモノは何もない。絶対命令権の令呪は無いのだから。

「大丈夫ですって。ね？」

「私に振らないでよ……土郎は？」

「え？ あ、うーん……桜に話を聞いてみないと……」

「仮にも戦争だと言つのに桜を巻き込む様な事は避けるべきだと思いますが……」

ライダーは事の成り行きを見守ることしか出来ないで黙っている。

そして……。

「せ、先輩もマスターだったんですね……」

「戦うつもりはないからな？ 俺はこの聖杯戦争を終わらせるために戦ってるんだ」

「うんうん。良かった良かった」

「本当に……何を考えているんですかあなたは？」

ドーナッツが大量に入った茶色の大きい紙袋を抱える様に持ち、ヴァッシュは一つ、また一つと口に放りこんで行った。

「ガンナー！ 私にも下さい！ どうして意地悪するんですか！？」

「意地悪って、僕が買って来たの。だからこれは……」

ギランツ！

獅子の獲物をロックオンした眼はガンナーへと移って行った。

「……これは一緒に食べようか？」

「望むところです……！」

「全くセイバー、あなたには食べると言うことしか頭にないのですか？」

「ライダー。仲間になったとは言え線引きは必要かと思いますが？」

「私は商店街の骨董品店でアルバイトを始めました。もちろんこの家に住まわせてもらう生活費の為です。あなたは食べるだけですか？ さぞかし食費を湯水のように流して行っているのでしょうか？」

ガンツ……

「わ、私だけが……働いていない？」

セイバーはここに来て、味方がいない事に気が付いた。
日常の味方と言うモノがない事に。

「と言う訳で！」

スパーンッ！

「何がと言う訳なんですか？」

「話す前に叩かないで下さいよおマスター。……とりあえず次はバ
ーサーカーを落とすべきだと思います」

「落とすって……アンタは戦う気ないでしょう？」

「その通り！」

「」「」「はあ……」「」「」

「ま、まあまあ。昨日の夜イリヤの事話したらなんか乗り気でさ……
……な？」

そう、ガンナーであるイレギュラーサーヴァントのヴァッシュは次なる標的をバーサーカーに定めていた。

「まあ聞いた通りのサーヴァントなら何とかなると思うんだよね」

「またそんな適当な事を……」

「それから今回は僕だけで行くよ」

「なっ 私達を置いて行くと言うのですか!？」

セイバーは喰ってかかる。いつもは戦わないと言っていた男が自分一人だけで敵陣に乗り込むと言い出したのだ。

「何で今更そんな事を言い出したのかしら? イリヤは女の子、まだ小さいわよ? ロリコン趣味だったの?」

「ははは……そう言うんじゃないさ」

「……そう言う事でしたら、私はついに行きますよ? マスターですからね」

令呪も無いマスターのバゼットはそう告げる。

しかし先ほどから言われている通り、不殺・ラブ&ピースと戦争中に詠うサーヴァントが何故戦うと言い出したのか? ヴァッシュの考えはこうだ。

バーサーカーはこの聖杯戦争の中で最強を誇る。それはサーヴァントだけでなく、マスターも魔力を潤沢に有しているためだ。普通なら魔力供給のコストパフォーマンスも含めて考えると、バーサーカーはかなり燃費が悪いため、セイバーが最も良いとされるが、今回のマスターが衛宮士郎ではマスターとしては正直言つてへぼ。魔力供給も出来ない。恐らく宝具を使用すれば即座にリタイアするのではないかと言う予測があつた。

では遠坂・アーチャーコンビはどうだろうか？ 未知数の能力を持つアーチャー。そして、魔力に申し分はないと思われる遠坂凜。バランスの取れているコンビだろう。しかし、バランスが取れているだけでバーサーカーを相手にすると生きて帰れる可能性は薄い。

では、ガンナーというイレギュラーであるヴァッシュ・ザ・スタンピードが戦ったことも会ったこともない、最強と言われるバーサーカーのサーヴァントには死ぬ危険性が無く勝てるのか？ その答えはNOだ。

やってみなくては分からない。だが、自分以外が行けば死ぬ可能性がある」と判断した瞬間にヴァッシュの意思は決まった。自分が行く。

「とりあえず、もう少し考えたら？ またキャスターに動きがあるかも知れないし、言峰のランサーだって動いてないわ」

「……うん。そうだね」

「じゃ、じゃあ買い出しに行ってくるか。今日は何食べる？」

少し間があったものの納得したであろうガンナーを見た家主、兼コツクの士郎は立ち上がる。

「シロウ、この前食べた肉じゃがと言うモノは難しいのでしょうか？」

「分かった。じゃあ今日のメインは肉じゃがにするか」

「先輩。私も手伝います」

士郎は買い物に出かける。

桜は米を研ぎ、今ある材料の下ごしらえを始める。

そう、また今日と同じような明日が来る。

みんなそう思っていた。

しかし、それは衛宮士郎が誘拐されるという事件から覆ることになる。

【アインツベルン城】

「くっ！ イリヤ！ 俺はウチに帰って食事の支度を……！」

「私のサーヴァントになるって言うまで帰してあげないわ。気が変わった頃にまた来るからねお兄ちゃん」

と言った会話をしたのが数時間前。

衛宮士郎はイリヤと商店街近くで会い、

そして、催眠魔法をかけられ攫われていた。

士郎は椅子に座らせられ、後ろ手にロープで縛られ身動きが取れないでいる。

「と言う訳で!!」

スパーンッ!

「天井はいりません」

「(さすりさすり)マスター、そんなこと言ってる場合じゃないですって。攫われたんですよ? 僕らの士郎君が」

「私のマスターです。私も行きます」

「当然私達も行くわよ?」

「わ、私はどうすれば?」

凜は行く気満々で、桜はオロオロしている。

しかし、ヴァッシュはそれを静止させて言った。

「どう考えても罠だ。どうしても来るって言うなら……安全なところまで離れていてくれ」

「なっ それじゃあ行く意味がないでしょうが!」

「そうです! それに私はサーヴァントですよ!?! 私のマスターが攫われているのに助けに行かないサーヴァントがありますか!」

「それでも! ……頼むよ」

オレンジ色のガラスの銀縁のメガネをかけ、ヴァッシュは言う。その口調にいつもの軽口を叩く雰囲気は微塵も感じられない。

そして、数十分後。アインツベルンの森の奥にある城にガンナーとマスターであるバゼットは到着していた。気配を消し、夜の森と一つになる様に二つの影は薄れて行く。

「さて、行きますかあ」

「大丈夫なんですか? あなたはバーサーカーと戦ったことも、見たことも無いでしょう?」

その当然とも言えるマスターの問いにヴァッシュは苦笑いで答える。

「多分……」

第06話 「衛宮邸に増えて行く人々」(後書き)

感想は随時受付中です。

次回、第7話【HARD PUNCHER・2】

何故『2』か？ それはヴァッシュを知ってる人だけが知っている。

第07話 「HARD PUNCHER・2」(前書き)

定期更新10日……も どうか分からないけどねw

出来るだけスピードアップできれば……と思ってるんですけどね。

まあとりあえず第7話とぞ。

第07話 「HARD PUNCHER・2」

「ガンナー名案があると言っていたハズですが……？」

「え！？ 駄目ですか！？ 完璧な作戦だと思ったんですけど！？」

ヴァッシュがバゼットに進言した名案というのはこうである。

1・ドーナッツ（30個入り）を菓子折りとして持参する。

2・喜んで食べてくれている間に、バゼットがシロウを探し救出。

3・こんなに良い人たちなら戦わなくて良いかも。と思わせたところで退散。

「大前提として、ドーナッツで喜びそうなのはあなたとセイバーだけです！ それにドーナッツなんていつの間に用意したんですか！
！」

「細かいこと気にしない気にしない♪ じゃあマスターはシロウ君をお願いしますね♪」

「本当に一人で大丈夫なんですね？ 令呪による魔力のブーストも無いんですよ？ それに相手はヘラクレスですから、命がいくつあっても足りないんですよ？」

「んゝ大丈夫ですよきっと。ほら、逃げる事だけなら僕自信ありますから」

「……そうですね。では！」

「はいはい」

ヴァッシュはバゼットと別れ、樂觀的に扉を開いた。

「あら、いらつしゃい。真正面から来るなんて大した自信ね。私のバーサーカーに一瞬で殺されちゃうのに」

「いやあゝ殺されたくないな。仲良くしようよゝなはははは」

「ガンナーのサーヴァント。イレギュラーな存在ね……早めに脱落してもらいましょうか。行きなさいバーサーカー！」

「■■■■■——！！」

「まあまあそんなに急がなくても、ドーナッツ買ってきたからさ。少し食べながら話そうよ。ね？」

「■■■■■■■■■■——！！」

しかし、命令を受けたサーヴァントが止まる事は無かった。一直線にヴァッシュへと接近し、巨大な岩の斧剣を振り下ろす。

ブオンッ！！

「……こ、怖っ！」

風圧を感じ 顔を歪ませるヴァッシュは完璧にかわしたと思っていた。

しかし、風圧だけで左腕に巻きついていいる革バンドが数本切れた。

「なるほど、完璧にかわしてもコレですか……」

「どう？ 降参する？ 降参するなら出来るだけ苦しまずに殺してあげる」

「って、あゝ あああああーッ！！？」

「な、何！？」

ヴァッシュの視線の先にはバーサーカーの足がある。その下には踏み潰されたドーナッツがある。どれも原形を留めている物はなく、ヴァッシュは一かけらを手に乗せて会話の通じないバーサーカーに泣きながら詰め寄った。

「僕のドーナッツが！ 酷いじゃないか！！ まだ一つも食べてないのに！！ もうこんなボロボロに…… どーしてくれるんだ！！
僕のドーナッツ！！！」

「な、何を言ってるの？ バーサーカー殺しなさい！」

「■■■■■■■■■■——！！！」

しかし、バーサーカーの斧剣が振り下ろされた場所にはもうヴァッシュはいない。バーサーカーの身体にしがみ付き、ドーナッツを返せ。弁償しろと泣きながら呪詛の様に泣いて這いまわる。

「何て動きなの…… バーサーカー！ 引き剥がして殺しなさい！」

命令は的確かもしれないが、ヴァッシュはバーサーカーの捕まえようと腕を高速でかわしている。どの様な動きをしてもヴァッシュを引き剥がせないでいる。

「ガンナー！ 撤退しますよ！！！」

「もう一人いたの！？ くっ！ お兄ちゃんまで！！！」

もう撤退しようと言うところだった。しかし、ガンナーは撤退を決め込まない。

「何をやっているのですかガンナー!!」

「良く分からないけど、それならアツチの方からやっちゃえバーサーカー!!」

「■■■■■■■■——!!」

その巨軀はバゼットと助け出されたシロウへと向かった。ヴァッシュはバーサーカーの頭部に回り、銃を抜き取る。そして、バーサーカーの右手である剣を持つ指に向けて撃った。しかし、バーサーカーは手を引いて斧剣で銃弾を受け止める。

「■■■■■■■■——」

「……それでも、僕は殺さない」

ズシャーントツ!!

ダンダンダンツ!!

ガキンツギギンツ!!

ダダンツ!!

ギギイイインツ!!

銃弾はリボルバーから無くなる。ヴァッシュはすぐさまスピードロダーでリロードする。その光景を呆然と見つめる二人の仲間にヴァッシュは声を上げる。

「逃げる!!」

「ガンナー！ お前も一緒に……！！」

「……生きて帰りなさい。いいですね？」

「バゼット！？」

スチャッ

「必ず戻る」

ガンナーは頭上に向けて銃を連射する。

そこにはもう屋根と言うモノが存在しなくなった。見えるのは星空だ。

そして、そこにいつものガンナーの姿は無かった。

アインツベルンの城の正面ロビー。

そこには最強のサーバントのバーサーカーがいる。

イレギュラーのサーヴァントのガンナーがいる。

バーサーカーの斧剣が振り下ろされる。

ヴァッシュの銃弾が斧剣を握るバーサーカーの指に撃ち込まれる。

バゼットの魔力が込められた銃弾は何度かバーサーカーの指が吹っ飛ばすが、すぐに再生してしまう。

「こりや大変だ……不死身の狂戦士か……」

「ふふふ、何を考えてるか知らないけど無駄だよ。私のバーサーカーは強いんだから」

そうマスターに言われて突撃して来る狂戦士。

ヴァッシュは真っ直ぐに銃を構えて連続して撃った。

1 発目、左肩に当たる。掠り傷程度の傷が入る。
2 発目、同じく左肩に当たる。掠り傷が少し範囲を広くする。
3 発目、また左肩だ。掠り傷が斬り傷になる。
4 発目、正確に同じ場所を狙い撃つ。肉が抉れる。
5 発目、ここまで同じ場所に狂いなく当たる。支点がずれ、バーサーカーはその巨体をヴァッシュでは無く、壁にめり込ませた。
時間にして1秒の出来事だった。

「そ、そんな！ 鉄砲6発なんかでバーサーカーのバランスが崩れるなんて!？」

「違うよ。まだ一発残ってる。スペシャルなヤツがね」

ヴァッシュはリボルバーのシリンダーを外し、空の薬莢を飛ばした。残りの一発を残し高速回転させる。

カチャッ

シリンダーを銃に固定し、バーサーカーのから空きになった背中にバゼットが魔力を大目に込めた弾を撃つ。

ヴァッシュは銃をバーサーカーに向ける。

しかし、その銃はあのような形だっただろうか？

ガンナーの腕はあのような形だっただろうか？

いや、更に変化して行く。

それはヴァッシュの宝具【エンジェル・アーム】だった。

腕は銃と同化し、白い片翼の天使の羽が生えて行くようだった。

その輝きは美しく、全てを照らして行く悪魔の光だった。

「な、何とか……制御できるか……威力も抑えて……」

「な、何よそれ！？ 戻りなさいバーサーカー！ アイツ何か変わったわ！！」

「■■■■■■■■——！！！」

しかし、突貫して行くバーサーカーは止まらない。

そして、光がバーサーカーを包み込んでいく。

城から撤退して行くバゼットと士郎は城の方で輝く光に振り返った。

「な、何だあの光……！？」

「ガンナーの宝具でしょう……シロウ君。もうここで大丈夫ですか？ 私はガンナーの下に戻ります」

「あ、おい……！！ ああくそつ！」

士郎は再度家に向かって走り出す。

セイバーを連れて戻ってこようと考えていた。

あの男は死んじや駄目だ。そう考えての行動だった。

衛宮士郎の中でのガンナーは異質とは言え、

ある意味で自分の理想と言える考えを実践している男であった。

誰も殺さない。

全てを救う。

正義の味方。

仮に自分が傷ついたとしても平和を求める男に見えた。

日常の中ではヘラヘラ飄々として、Love & peace
ceと言っているが、

その軽口を叩きながら、実践している男に思えた。

そんな男だからこそ死んでほしくないし、助けたいと思った。

そんな衛宮士郎自身には助けられる力は無いに等しい。

そんな衛宮士郎が戦わせないと言い続けているセイバーに力を借り
ても自分の憧れに近い男を救おうと思っていた。

「死ぬなよ……死ぬなよ！」

瓦礫に覆われて行く城のロビー。

そこには蹲る巨体のサーヴァントと、赤いコートの金髪のサーヴァントがいた。

「な、何なのよあなた！！　バーサーカーが防御の姿勢を取るだなんて……」

「今のは威力を抑えて撃つただけど、今の数十倍は撃てる……もう降参しない？」

バーサーカーは呼吸を整えて傷付いた個所の再生に集中している。

「数十倍！？　う、嘘よ……バーサーカー！　早く再生してこんな奴壊しちゃって……！」

ヴァッシュはイリヤの声を聞き、仕方が無いと溜め息をついて、イリヤのいる階段の踊り場へと進んでいく。

「な、何よ？」

ゆっくりと歩み寄って来るイレギュラーにイリヤは怯む。

人であったモノが生前に英雄となり、英霊となったサーヴァントを殺すのは難しいが、サーヴァントを使役しているマスターを殺せばサーヴァントは自然と消える。それがバーサーカーであれば尚のこと容易い。

イリヤ・スフィールはそれを直感し、バーサーカーに救いの視線を向ける。

しかし、未だ再生をしている巨漢のサーヴァントは蹲ったままだ。令呪を使用してでも目の前の男を消すべきか？

「君は……こんな事をすべきじゃない」

「ちっ……つまらんど道化が」

「だ、誰っ！？」

突然聞こえてきた声。それは頭上からだった。

顔を上げた先には無数の剣を浮かせているスタイリッシュな格好をした男が一人いた。

「敗者は殺さんと聖杯には成らんぞ？」

パチンッ

男が指を弾く。

そして、無数の剣が蹲るバーサーカーに突き刺さって行く。

「■■■■■■■■■■——！！！」

「ば、バーサーカー！？」

「や、止める！！」

雨の様に降り注ぐ剣にバーサーカーの咆哮だけが響き渡る。

バーサーカーは暴れる。再生よりも反撃を優先し、狂戦士として、斧剣を振り回す。

何本かの剣は払い落とすが、それでも何本かの剣はバーサーカーを貫いて行く。

ヴァッシュも何本かを撃ち落とす。それでも剣の雨はやまない。

「ふんっ、天の鎖よ！！」

バーサーカーに鎖が巻かれる。

「ふはははは！ その鎖は例え神であつても逃れることは叶わぬぞ」

反撃の術も無くなり、首に締まる鎖により咆哮も出ない。

そして、バーサーカーは光の泡沫となり消えていった。

「おい道化、バーサーカーを消さずにその差を見せつけ、マスターを殺すかと思いきやつまらん最後だったな。イラついて我が手を出してしまつたぞ」

「どうして殺したんだ……」

「殺す？ ふはははっ 何を言っている。サーヴァントとは既に死人よ。死んでいるモノを殺すとは不思議な事を言うな道化。セイバーがいると思ったのだがな、いないのなら我は帰るぞ。ではな道化」

イリヤ・スフィールは終始無言だった。

「ガンナー！ 無事ですか!？」

「あ、マスター……戻ってきたんですね。ちょうど良い、この子を……」

衛宮士郎は家に辿り着いた。

「シロウ！ 無事だったのですね!？ ガンナーはどうしましたか!？」

「アイツはバーサーカーと戦ってる。セイバー頼む、一緒に来てくれないか？」

「あれ？ どうか行くのかい？」

そこにいたのは赤いコートのガンナーとバゼットだった。

「無事だったの？ バーサーカーは！？ …… って、イリヤ・スフイル！？」

そう、そして敵で自信満々だった記憶に新しい少女。イリヤ・スフイルは意気消沈させて無言でヴァッシュに手を引かれていた。

「……」

「どう言う事？」

凜の当然ともいえる質問にバゼットは、ガンナーと帰りながら聞いた事を答える。

「バーサーカーは謎のサーヴァントの介入により殺されました。イリヤ・スフイルはその時点で脱落と言う事になりますが、ここで保護するのが妥当と判断しました。シロウ君どうですか？」

「あ、ああ、俺は願っても無いし、イリヤともちゃんと話したかったし……」

「せ、先輩は小さい子がその……好きなんですか？」

「はいはい、こんな時にボケないで桜。それで？ 謎のサーヴァントって誰なのよ？ 残ってるのはアサシンとキャスターとランサーだけのはずよ？」

「私は見てないのですが……」

「金髪で、無数の剣を放出して来る偉そうな感じだったよ。セイバーちゃんを探しているみたいではあったけど……」

ヴァッシュのその答えに、セイバーは青ざめる。

「あ、アーチャーだと……そう言うのですか？」

「アーチャー？ アーチャーなら屋根にいますでしょ？ どうしたのよセイバー？」

「それは……もし間違い無ければ、そのサーヴァントは前回の聖杯戦争でアーチャーのクラスだったサーヴァントです」

——そして、セイバーの口から第4次聖杯戦争が語られた。

第07話 「HARD PUNCHER・2」(後書き)

感想は随時受付中です。

第08話 「ZERO」(前書き)

真面目ぶって書いてみた。

f a t e / z e r o 読みなおして書いてみた。

と言う訳で、今回はセイバーの過去話がメイン。

第08話 「ZERO」

その王は、幾たびの戦場を越えて不敗。

その王は、ただの一度も敗走はなかった。

その王は、ただの一度も理解されなかった。

その王は、常に独り 剣の丘で勝利に酔った。

故に、その王の生涯に意味はなかった。

—— 故に、その王は ■ ■ を求めた。

—— 10年前。

第四次聖杯戦争は終幕へと進んでいた。

サーヴァントとマスターは残すところ二組となっていた。

キャスター、ランサー、アサシン、バーサーカー、ライダーは消えた。

そう、残っているサーヴァントはセイバーとアーチャーだ。

聖杯は7つの内5つの魂を注がれ、黄金の輝きを放ち、勝者を待つ――。

煉獄の如く燃えさかる炎の中、セイバーは歩みを進める。

バーサーカーに負わされた傷は自己再生能力で治癒できる域を優に超え、曇り一つなかった騎士甲冑は黒い煤に汚れ、その膚は血の気を感じさせずに青ざめている。膝は軋み、足腰は震え、呼吸も荒い。それでも彼女は歩みを止める訳にはいかなかった。全てをやり直さなければ、王の選定からやり直さなければならなかった。

――王は、人の気持ちが分からない――

「まだだ……まだ償える……まだ、間に合う……私には聖杯がある。運命を覆す奇跡がある……」

常勝の王は歩み続ける。

勝利の剣に縋りつき、杖の様に突き立て、歩み続ける。

人の心を汲めずとも、孤高の王と罵られようと、そんな是非は二の次でいい。それでもその手に勝ち取った勝利を、故郷に、臣民にもたらし得るならば――それこそが、彼女が『王』として自身に課した機能の全てだ。

この手に聖杯さえ握めれば、全てを償える。精算できる。

今はもう、それだけが、王としての道を選んだ彼女の全て。満身創痍の身体を引きずるように、セイバーは歩き続けた。

一步、また一步と進めば進むほどに気の遠くなるような痛みが襲い続ける。

よろめきながら、躓きながら、それでも彼女は歩みを止める訳にはいかない。責務があつた。王として果たさなければならぬ誓いがあつた。そして、それを遂げるために唯一残された道は、聖杯を手にする事だけだつた。だから進んだ。傷付く身体を鞭打ち、齒を食いしばって耐えながら。

そして、彼女は遂に聖杯を見つけた。燦然と輝く黄金の杯が、炎に囲まれて浮いている光景を。ああ、まぎれもなくあれこそが目指す聖杯だと。

「アイリスフィール……」

その剣に賭けて守ると誓い、そして果たせなかつた姿がそこにあつた。またしても自分は誓約を破つた。自責と屈辱の中、脳裏に浮かぶのは誓いを交わした時の彼女の言葉だつた。

——セイバー、聖杯を手に入れて。

あなたと、あなたのマスターのために——

「……はい、せめてそれだけは、貫く。それだけが……」

今の彼女に残された、全て。

未だ彼女が勝利の剣を放さず、倒れてしまいそうな身体を起こし、呼吸を続けるのはそれを手に入れるため。ただそれだけだつた。

不意に左足を貫かれる。たまらず転倒し地に伏せることしか出来な

い。彼女の前に現れるのは、ほぼ無傷な黄金の鎧を纏うアーチャーの姿だった。続々と宙から現れ出でる『王の財宝』の兵器軍が、全ての切っ先をセイバーに向け待機していた。

あとは主の号令一下で無数の剣や槍はセイバーを串刺しにするだろう。

「セイバーよ……妄執に堕ち、地に這ってなお、お前と言う女は美しい。剣を棄て、我が妻となれ」

真っ直ぐに歪むアーチャーの告白は、しばしの当惑の中にあつたセイバーを、ふたたび怒りの虜にさせるのには十分だった。

「貴様は、そんな戯れ言のために……私の聖杯を奪うのか!」

しかし、吼えるセイバーの目の前に剣が降り、セイバーを吹き飛ばす。断り続ける彼女の恫喝すらをも愛嬌とするかのようにアーチャーの歪みは断われれば断るほどに増大して行く。セイバーの傷付いた足を再度決る。その激痛に悶絶する姿にアーチャーは声高らかに笑う。

セイバーは憤怒していた。思考は沸騰している。二の太刀も考えず、この身が消えようとも残された力、全力を乗せて『約束された勝利の剣』を叩きこむことを考えていた。未だ真名も知れぬ英霊ともなれば、対城宝具に抗しうるほどの防御手段があつたとしても不思議はないが、勝ち誇り油断しきっている今のアーチャーや隙だらけだ。まさか今の彼女が反撃に転じようとは思うまい。

だが、今のセイバーの位置からアーチャーを狙うと言うのなら、その射線の先には聖杯もある。例えアーチャーを一撃で仕留めたとしても、その時は聖杯もろともに焼き尽くされてしまふだろう。それ

では何の意味もない。

極限の選択を強いられながら活路を探る彼女は、もう一つの影を見つけた。

まるで、亡霊の如く佇むロングコートのシルエット。それはセイバーと契約した正規のマスター、衛宮切嗣に間違いなかった。絶望的だった状況に一縷の光明が射す。

強制命令権の令呪はまだ二つ残っている。奇跡に等しい不条理すら可能とするあの助けを借りれば、この状況を打破できるのではないか。

今の彼女の窮状を見れば、マスターである切嗣とて、取り得る決断は一つだろう。幸いにもアーチャーは切嗣に気付いていない。そして、切嗣が右手を掲げ、その甲に刻まれた令呪の輝きを露わにする。

目の前にいるアーチャーに対抗しうる援護が得られればどんな手だろうと構わない。痛覚を遮断して死力を尽くせと言われれば、セイバーの肉体は全身の負傷を完全に度外視し、身体が崩壊するまで最大限のパワーを発揮できるだろう。瞬間移動で聖杯の下まで馳せろと言われれば、この致命的な位置の不利を解消し、聖杯を保護しつつアーチャーのみを葬るだけの、精妙な出力調整で『約束された勝利の剣』^{リバー}を放つことも可能かもしれない。それが令呪だ。マスターとサーヴァントが同意の下に行使用する令呪ならば、どのような無理も押し通る。セイバーはそこに最後の期待を託す。

——衛宮切嗣の名の許に、令呪を以てセイバーに命ず。

宝具にて、聖杯を破壊せよ——

「……………な……………」

旋風が渦を巻き、周囲の炎を薙ぎ払う。

解除された風王結界の中から黄金の剣が姿を見せた。

セイバーの思考が理解を拒んでも、サーヴァントとしてのその肉体は、何の疑問もなく令呪の機能を受け入れる。

「な、馬鹿な——何のつもりだ!？」

アーチャーもこれには驚きを隠せなかった。聖杯を背にしている限り、セイバーは決して奥の手を使えぬものと、高を括っていたからだ。

「……………ッ……………違うッ!！」

セイバーは吼える。声も張り裂けんばかりに絶叫した。伝説の騎士王として、最優クラスたるセイバーのサーヴァントである彼女が備えていた特級の対魔力は、令呪の縛りすら瀬戸際で食い止めるほどのものだった。強権と抑止、闘ぎ合う二つの力はセイバーの中で荒れ狂い、その細い身を今にも引き裂かんばかりだった。

「何故だ!？ 切嗣——よりによって貴方が、何故ッ!？」

有り得ない。こんな命令は有り得ない。

セイバーに勝るとも劣らず、衛宮切嗣と言う男は聖杯を必要としていた筈だ。セイバーの騎士道精神を邪魔と考え、冷酷なまでに聖杯戦争を勝ち進んできた男が、何故ここで聖杯を破壊させるのか。愛する妻であるアイリスフィールが命を捧げた儀式の成就を、なぜ今

になって無為にするのか？

切嗣は再度右手の甲をセイバーに向けて示した。――最後に残った、令呪の一面を。

――第三の令呪を以て、重ねて命ず――

「やめろおおオオツー！」

自らの誇りが、希望が、今度こそ砕け散る瞬間を目前にして、セイバーが涙を散らしつつ絶叫する。

――セイバー、聖杯を破壊しろ――

それは、もはや抗えるはずもない暴威だった。重ね掛けで増幅された令呪の強制力は、泣き叫ぶセイバーの身体を蹂躪し、圧搾し、その総身からありったけの残存魔力を引きずり出して、破滅の光へと収束させた。

アーチャーはその光の直撃こそ避けたものの、セイバーのマスターである切嗣を処刑する機を逃した。

かつてのアイリスフィールの一部であった黄金の聖杯は、閃光の灼熱に抗うこともなく、静かに形を失い、消えて行った。その末路を正視できず、セイバーは目を閉ざす。――今、最後の希望が潰えた。彼女の戦いが終わった。ならば、こんな無残な結末を、どうし

て目を開けたまま見届けられようか。実際、彼女には残存魔力は無く、サーヴァントとしての肉体を維持できるだけの余力すら残していなかった。そして勿論、契約者であるマスターもまた、彼女を繋ぎとめる意向などもありはしなかった。

——そして、現在。

「私が知る衛宮切嗣と言う人物は、冷酷で非情なマスターでした……」

セイバーは自分の記憶に残る、前回の聖杯戦争を振り返っていた。

「親父が……」

「キリツグ……」

そう、アイリスフィールと言うのはイリヤの母親だ。つまり、イリヤは言うなれば聖杯の娘とも言えなくは無い。アインツベルンが用意したホームンクルス。聖杯の担い手……ただ、それでも衛宮切嗣の娘であり、衛宮士郎の姉にも当たる。そんな少女は自分のサーヴァントであるバーサーカーを、前回の聖杯戦争から存在し続ける謎のアーチャーに消された。

——バーサーカーは……強いね——

彼女を守護した狂戦士はもういない。最強のカードで消す側にいた少女は、消される側に回っていた。そして、重苦しい空気の中。バゼットは淡々と事務的に現状と今後を考え口を開いた。

「そのサーヴァントはイリヤスフィールを狙って来る可能性もありますね」

「そ、そうね……でも、そのサーヴァントがどこにいるのかなんて分からないし……当面はキャスターとアサシン。もしくは綺礼を攻めるか……」

真面目な話をしている自分のマスターや凜を余所に、ガンナーは縁側で頬に涙を流していた。何故、この聖杯戦争と言うものはあるのか。願いを叶えるために人の命を奪うのか。仮にサーヴァントだけの命だけで済む聖杯戦争だったとしてもヴァッシュ・ザ・スタンピードという男は納得しきれないだろう。

「——聖杯という願望器はそう言うものだ。魔術師にとって最大の帰結ともいえる到達点だ。であるならば、自分を除く全てのサーヴァントは殺した方が良くに決まっている。まあ生粋の魔術師なら自分のサーヴァントも令呪によって殺すだろうがな」

願いを叶える万能の器、聖杯。それをより良いモノに仕上げるならばサーヴァントの命は奪うべきだ。そして、それに巻き込まれてし

まうなら人の死も仕方が無い。上から聞こえてくるその声は屋根で策敵を行い続けているアーチャーだった。

「そんな簡単に言わないでくれ。誰も死ななくて良い方法があるはずなんだ」

——誰にも人の命を奪う権利なんてない。

それはヴァッシュが教わったとても大事なことだった。

人間の醜い面を幾度となく見て、時には殴られ、斬られ、撃たれても命を他人の命を守ってきた男の身体は傷で出来ているようなものだ。肉は抉れ、ボルトや鉄で補強され、左腕は義手。その傷は無駄なモノだと彼の同族は言った。人間を守ってどうする。アレは身勝手な醜悪で不完全な存在だと。そんなモノに優良種であるお前が傷を作る意味は無いのだと。

「貴様は……いや、何でもない」

そう言つてアーチャーは話す事を止め、再び夜の闇に視線を向けた。ヴァッシュはバーサーカーと戦っている時の事を思い出していた。常人には狂戦士の叫びにしか聞こえないその声を。

<私を相手に手加減をして挑んでくるとは……実は私の命は12個あるぞ>

<それでも僕は殺さない……>

あの時、ヴァツシュは手を下さなかった。狂戦士でさえも話せば分かり合うと思ったからだ。無理だったとしてもマスターであるイリヤスフィールをと思っていた。どこまで行ってもヴァツシュの考えは変わらない。しかし、別の手が下り、バーサーカーはこの聖杯戦争から消えた。ヴァツシュは両手で顔を覆い嗚咽を噛み殺していた。

「なあ、そもそも何で親父は聖杯を壊したんだ」

「分からないわ。セイバーの話だけだと、聖杯は手に入る直前のマスターだった筈よ。でもそれを壊すなんて……考えられないわ」

誰もその答えを出せる者はいない。聖杯が願いを叶える。それがどう言う事なのかを理解していないからだ。衛宮切嗣が聖杯を破壊させたのは、聖杯の本質を知ったからだ。魔術師からすればそれは大罪だ。しかし聖杯を真に理解している者であるならばその行為を咎められる者がいるだろうか。理解して尚も聖杯を求められるのだろうか。

「ガンナー……あなたの意見を聞きたい。私とシロウが凜と休戦協定を結んだのは確かですが、ライダーを迎え入れ、バーサーカーのマスターまで連れてきた貴方には責任がある。今後はどうするのか。それを聞かせて欲しい」

セイバーは切り替えて言う。

ガンナーは涙を拭い、振り返る。

恐らくその場にいた者はガンナーの涙に気付かなかったであろう。

「僕は、キャスターさんとアサシンを止めるべきだと思う」

そして、ガンナーは的確な判断をしていた。

最も危険とされていたバーサーカーが消えた今、こそこそする必要は無くなり、表立って人の命を吸い取るというサーヴァントに狙いを定めていたのだ。言峰をマスターに構えるランサーはあれ以来見ていないし、謎に包まれた2人目のアーチャーも対応のしようがない今、アサシンとキャスター。これが最も狙いやすい敵と言えた。

「そうだな。やっぱりもう一度 柳洞寺に行くのが良いな」

「そうね。でもガンナー、また説得とか考えてる？」

「……うん……まあ」

「『まあ』じゃ困ります！ サーヴァントとして召喚された以上、戦わずして何としますか！！」

いつもの会話の流れが出来たと思われた。

しかし、イリヤスフィールはガンナーに疑問を投げた。

「ガンナーはどうして戦わないの？ ううん、別に戦わない理由は良いわ。貴方の過去を教えてくれる？」

現状、真名が知れているサーヴァントは脱落したバーサーカーを除いて、ランサー・アサシン・キャスター、そしてガンナーの4名だった。凜のサーヴァントのアーチャーは記憶に障害があり、まだ思

いだせないと言う。もう一人の前の聖杯戦争から存在してしまっているアーチャーと思われるサーヴァントは不明。

ランサーはケルト神話の大英雄クー・フーリン。宝具は、必中必殺の呪いの槍を使用して因果を逆転し「敵の心臓に命中している」という事実（結果）を作った後に攻撃（原因）を放つ対人宝具「刺し^ゲ穿つ死刺の槍」と、この槍の呪いの力を最大解放し投擲して使用する対軍宝具「突き穿つ死翔の槍^{ゲイボルグ}」。魔術にも秀で、18の原初のルーンを習得しているが、直接的な戦闘を好むため、使用することは稀なサーヴァントだ。

キャスターはギリシャ神話に登場する裏切りの魔女メディア。魔法こそ習得していないものの、魔法に近いレベルの神代の超高等魔術を平然と扱い、魔術師としての能力は魔法使いと同等、もしくは上回るというレベル。しかし大抵のサーヴァント、特に三騎士のクラスに召喚されたものは対魔力を備えているため、魔術が主な攻撃手段となるキャスターは全サーヴァント中最弱と言われる。そのため、策略を巡らして着実に力を蓄えている。

アサシンは佐々木小次郎。宝具を持ち合わせていないが、ひたすら磨き抜かれたその剣技は「多重次元屈折現象^{キシユア・ゼルレッチ}」と呼ばれる魔法域（第二魔法の一種）の事象にまで高められ、『まったく同時に』三つの斬撃を繰り出して敵を斬るという必殺の『燕返し』を編み出すに至った。

真名が知れるとはつまりそう言う事だ。

情報が漏れる。

得意分野は。

弱点は。

しかし、このガンナーのイレギュラーのクラスに身を置く男、ヴァ
ツシュ・ザ・スタンピードには情報が全くない。

「あら、イリヤ。戦うサーヴァントもないのに情報収集かしら」

「いいえ、ただの興味よ。凜。私のバーサーカーを殺そうと思えば
殺せただけなのに、このサーヴァントは手加減しながら戦っていた
のよ。名前だけ分かってても と言う生き方してきたのかが分から
ないと、納得がいかないわ」

「……何も面白くなんてないよ。さ、ドーナッツでも食べてさ……」

ヴァツシュはセイバーだけでも味方に付けようとするが、用意して
いた切り札はいつの間にか瞬殺されていた為 今回ばかりは叶わな
かった。ここにいる全ての視線がヴァツシュに集中している。

マスターであるバゼットも止めない。止めなければ自分のサーヴァ
ントの情報が漏れると言うのに彼女は気にせずに同様に興味を持っ
ていた。仮に止めたとしても情報を引き出す事は出来ないとも踏ん
でいた。一度は言峰の騙し打ちに脱落したバゼット自身、聖杯は手
に入れられればラッキー程度に思っているため、今の興味はガンナ
ーに移っていた。

確かに不思議ではない。ガンナーと言うイレギュラー・サーヴァン
トが召喚され、最速・最優・最狂のサーヴァント達をことごとく負
かしてきた。真名は分かってても情報は無い。興味関心を引かれない
訳がない。しかして確かに不思議ではある。生前の彼はこういった
人間だったのか？

イリヤスフィールは改めて聞きなす。

——あなたはどんな英雄にんげんだったの？
ヴァツシュ・ザ・スタンピード——

第08話 「ZERO」(後書き)

感想は随時受付中です。

そして、次回は彼の過去がメインとなる……んじゃないかな。

第09話 「ヴァッシュ・ザ・スタンピード」(前書き)

今回のサブタイトルは本編で変わります！
ルビが振れると良いんですけどねw

あゝ今回は長いよ。

それにTRI-GUNキャラが出てくる出てくる。

今回は割と真面目。あ、前回もか……まあ最後の方で崩しましたけどねw

では、張り切ってどーぞー。

第09話 「ヴァッシュ・ザ・スタンピード」

第09話 『バケモノ人間ではなく化物ニシゲンだった男』

——あなたはどんな英雄にんげんだったの？

ヴァッシュ・ザ・スタンピード——

イリヤスフィールのその質問にヴァッシュは身を縮めた。

「た、楽しい話なんかじゃないよ……」

一筋の汗がガンナーの頬を伝う。

「……あ、あーっ！ もうこんな時間だ早く寝ないと！ 明日の限定50個のスペシャルドーナッツを買いのがしちゃうよ！ あ、お

風呂先に貰うよ。じゃー！」

「あ、ちよつとガンナー……！」

そそくさとヴァッシュは行ってしまふ。話を振ったイリヤスフィールはお茶を飲んで別段気にしない様子だ。

「イリヤスフィール、自分で話を振っておいて止めなくて良かったのですか？」

セイバーの疑問にイリヤは余裕の笑みを浮かべて片眼を開く。

「別に言ってくれるとは思ってなかったわ。ずっと一緒にいたこの誰にも言っていないでしょ？　なら言う筈はないと思ってたわ。でもね、聞く方法は彼の本心からじゃなくてもあるの」

それは非人道的な話だった。衛宮士郎と間桐桜を除いたここにいる者はそれに気付く。『魔術』を行使すれば記憶を見るのは可能だ。勿論、対象が抵抗しなければの話なので、彼が眠りについてからという事になる。

「で、でも……起きるでしょ普通……」

「あら、失敗してないと思うけど？　ガンナーのマスター。ガンナーの対魔力はどの程度なのかしら？」

「……ほぼ人間のソレです。攻撃などの魔術は回避できるそうなので問題ないのですが……寝ている時などは無抵抗に等しいでしょうね。何か仕掛けていたのですか？」

そう、イリヤスフィールは眠りの術式を与えていた。ガンナーであるサーヴァントは今日は深く眠りに堕ちることだろう。

「あとは凜。あなたが宝石を人数分 提供してくれるだけで良いわ」

「ああ……そういう事……良いわ。私も興味があるしね。それぐらの出費で済むなら安ものと割り切るわ」

そして、深夜になった。

パタンッ

「どうでしたか凜」

「問題ないわ。信じられないくらいグッスリ寝てるから。念の為に軽く蹴りも入れてみたけど大丈夫みたいね。でも……」

宝石を幾つか持って出てきた凜は、ヴァッシュの部屋から出てきた。宝石にはヴァッシュの記憶をコピーした宝石がある。成功して浮かない顔なのは、寝間着から覗いていた足や手の傷が脳裏に浮かんでいるに他ならない。最速のサーヴァントを更なる速さで退け、最優のセイバーの懐に一瞬で入りドーナッツを突き出し、更にバーサーカーをも生かそうとしたサーヴァントだ。何故あのような深く抉れた傷を負うのか。それだけが彼女の疑問だった。そして、それは手に持つ小さな宝石を呑みこんでしまえば理解できることではあった。

「こ、これを飲むんですか？」

「そうよ。身体の中に入ってしまったえば溶けるわ。それが情報となつてアイツの過去が分かるようになってるわ。もちろん全てじゃないわ、結構飛び飛びのはずよ」

宝石を飲んだ事が無い上に、宝石魔術の知識が無いに等しい桜は宝石を見つめて信じ切れずにいた。それを尻目に 魔術回路作成のために宝石を飲んだ事がある土郎は人数分のお茶を居間で用意していた。

「ほら、アーチャー。アンタも降りてきて飲みなさいよ」

「……ああ、分かった」

—— 砂漠だ。砂漠が見える。

砂漠を走る列車に、町の中心部に存在する巨大な電球。

この星の人間はどうやらこの電球の力で生きているようだ。この電球が、今の現実で言うところの電気・ガス・水道などを生み出す役割をしているようだ。どうやら【プラント】というモノらしい。

そして街にはガンマンと呼ばれる様な人達。賞金稼ぎ等の荒くれ。それらが集う酒場。まるで西部劇のようにも見える。当然ながら普通の生活をしている人もいる。

そして、意識は深層心理へと向かう。

体は傷で出来ている。

血潮は砂で、心は硝子。

幾たびの戦場を越えて不敗。

ただ一度の敗走もなく、

ただ一度の勝利もなし。

彼の者は常に独り砂漠の荒野で人を信じる。

故に、生涯に意味はなく。

その体は、きつと無数の傷で出来ていた。

『ヴァッシュ・ザ・スタンピード』という男の話をしよう。

ああ いや、その前に聞かせてくれないか。悪人と善人がいて、君ならどうする。君の手には拳銃という武器がある。相手は丸腰だ。

仮にこの状況下で誰を殺したとしても罪には問われまいとしよう。さて、君は誰を殺す。悪人を殺すのかい？ どうして？ ああ、その通りだ。ソイツは悪い事をした。死んでも誰も困らない。逆に誰かに感謝されるかもしれないね。おや？ そっちの君は善人を殺すのかい？ ああ、そうだね。君と同じように、何故殺されるのか泣き喚いて逃げ惑う姿に終わりを与えるのも面白いと、そう考える人もいるだろうね。

しかしだね。彼はどちらにも殺さないのさ。もし仮に君達のすぐ近くに彼がいるとしたら、その身を呈してでも、銃弾を受けてでも誰も死なせないようにするのさ。そう、これから話すのは、彼が何故そういう男なのか、どのように生きてきたのか。まあそういう事かな。

最初の怪我はいつだっただろうか。そんな事も思い出せないほどに彼の傷は無数にあり、酷いと言えないものだった。彼は同族であるナイブズと一緒に生まれた。両親などいない。たまたまそこにいた人間に育てられた。しかしヴァッシュは、たまたまそこにいた『レム・セイブレム』という女性から大切なことを教わった。ああ、レムって言うのはヴァッシュ達の母親のような存在だ。独自の強い信念を持っていて、命を賭けて誰かを守ろうとするその献身の姿が、後のヴァッシュの行動原理となっているようだ。

ある日、幼い頃のヴァッシュは蜘蛛の巣に囚われた蝶を見つけた。蜘蛛はゆっくりと蝶に近づき、捕食しようとしている。彼は手を差し伸ばし蝶を助けようとする。そこに割り込むように伸びてきたのはナイブズの手だった。その手は蜘蛛を握り潰していた。ヴァッシュは泣いた。「どっちも助けたかった」と。しかし、ナイブズは言う。「蝶を助ければ蜘蛛はお腹を空かせて死んでしまう」と。それ

に対してレムは「そんなに簡単に結論を出しては駄目」だと言う。
最良の手段があったはずだと。

—— 誰も…… 人の命を奪う権利なんて無いわ ——

命の大切さをヴァツシュは知る。その先も人の命の大切さを知って行く。しかし、ナイブズはそれが煩わしかった。弱肉強食。それが簡単にナイブズという男を一言で表せる言葉なのかもしれない。優秀な者が生き残り、弱い者は死んでいく。そしてナイブズは人という存在を多く消した。多く殺した。自分達の方が遥かに優秀だと信じて。

—— ヴァツシュ！ ナイブズを……！！ ——

レムの最後の言葉を刻み、大人になったヴァツシュはナイブズを探す旅に出た。

【第3都市ジュライ】

「いらっしやい派手な服だね。芸人さんなんだろ。はいよりンゴ6
個で3\$\$\$」

「アイスだ！ 私が命じたのはアイス！！ アンタは新入りなんだからちゃんと……！」

「勝手に連れて行くな！ そいつには厨房を手伝って貰うんだよ！

「さあ喰ったぶん働きな！」

「あつくそババアの子分を！！」

赤いコートの男は子供と戯れ、平和な日々を過ごす。

「ああ、アンタの探してた人な。戻って来るの4日後だそうだよ」

「あのデカい屋敷で何やってるんだかな」

「あ？　なんだよ用がすんだらもう行っちゃまうのか？」

「俺達の団は簡単には足抜け出来ないぜ」

「あなたつてもう何年もここに住んでいる様な感じよね。名前は？」

「ヴァッシュ？」

「変わった響きねえ」

「ヴァッシュ……」

「ヴァッシュ……」

赤いコートの男は探し人を見つけた。しかし……

「よおヴァッシュ」

血まみれの探し人と、小さい頃に別れた男がそこにいた。

「100年近く人間どもの中で生きてきて、お前一度も人間に対して憎しみを持った事が無かったのか？」

「……やめろ」

「嫌だね。大事な話だ。見た時は絶句したぜ。その身体中の痕、何度裏切られた？　何度傷付けられた？　何度嘘をつかれた？　何度

屈辱を受けた？ 人間扱いされなかったことは？ 大切なものを奪われた事は？ いわれなく疑われた事は？ 笑われながら踏みにじられた事は？ …… 現実を凝視しろ。お前は矛盾だらけた。綺麗事と痩せ我慢の生き方がお前の心を蝕んでいるんじゃないか？」

「亜阿あ唾ア？あ亞あアア——ツ！」

全てを失った人は殴り、奪い、罵り合った。だから瓦礫の高台で聳え立つていた彼を見た者は彼を犯人だと決めた。実際そうだった。操られるように制御が出来ない暴威にヴァッシュはその光を地上に放ったのだ。

そのいのちは
よいいのちか

レムをなくし
独りになつて

こころの中の彼女が微笑うように
あるく

その生き方が確信になつて
ゆらいで

喜びの涙と哀しみの涙

幾千万の銃弾の中
痕はふえて

そして たどりついた場所は――
歪みが導く 更なる絶望

わすれようとしていたこと
封じようとしていたあやまち
とりかえしのつかないこと

助けた命はいくつだっただろうか
救えなかった命はいくつあっただろうか
救った命に間違いはなかっただろうか……

「そんな事は分らない！ 分らないよ！ でも……これだけは
言える。僕が消してしまったあの人たちは――優しかったんだ……」

そして、ここに600億\$の賞金首、『ヒューマノイド・タイフーン人間台風』ことヴァツシユ・ザ・スタンピードが手配書にて世に知れ渡った。彼が歩いた後にはペンペン草の一つも残らない。街を灰に変える悪魔の使い。人の形をした化物。そう、彼は人間ではない。この星で生きる人にとって必要なプラント。その自立種だ。その能力は人間を遙かに凌ぎ、何年も何十年も何百年も生きられる存在であり、人間と比べると老化和というモノが無いに等しい。いつまで経っても見た目20代の優男は150年以上生きてきた化物プラントだった。

ナイブズは同胞であるヴァツシユを人間であるクズと一緒にさせることに苛立ち、ヴァツシユを無理矢理にでも自分の手元に置こうとした。魔人と呼ばれる、人間でありながら人間を超えている殺戮集団を刺客にして 襲ミわせた。彼の目的はヴァツシユとは対極にある——人類ヒューマンの抹殺そくじだった。ゴミが消えれば同胞だけの世界が出来上がる。ただ、それだけだった。

後にナイブズの居場所までの案内役だと分かる男である『ニコラス・D・ウルフウッド』は牧師と名乗る。孤児院の真似ごとをする彼は何人も殺してきた。ヴァツシユの生き方にも理解できない事が山ほどあった。何故笑うのか？そして、何故その笑顔は空っぽなのか。人を不安にさせる笑顔だった。それが苦笑いとかであったならどれだけ楽だろうか。それほどヴァツシユの笑顔はウルフウッドにとつて空っぽに見えた。

「ええかトンガリ。こないな時代やと人生は絶え間なく連続した問題集や。揃って複雑。選択肢は酷薄。加えて制限時間まである。一番最低なんは夢みたいな解法を待って何ひとつ選ばない事や。オロオロしてる間に全部おじゃん。一人も救えへん。……選ばなアカンねや！！一人も殺せん奴に1人も救えるもんかい。ワシらは神さまと違うねん。万能やないだけ鬼にもならなアカン……」

「……ウルフウッド……でもやっぱりそれは言葉だ。今そこで人が死のうとしてる。僕にはその方が重い」

時には衝突する事もあった。

「何故撃った！？　ウルフウッド！！　彼に撃つ気はなかった！！」

「トリガーに指が掛つてもか！！　いい加減にせえ！！　お人好しにも程があるわ！！　……しゃあないやろ　誰かが牙にならんと誰かが泣く事になるんや……」

自分が狙われていたとしてもヴァッシュは殺した方を責める。それほどまでに真っ直ぐな男だった。その男の背中を何度も守ってきたウルフウッド。何度も知られぬところで殺してきた。そして、自分が窮地に立たされた時、彼の一途な思いを顧みた。

「わかってる。わかってるがな　あいつは馬鹿や。いつてる事は現実を見ないガキのたわ言や。大馬鹿や。そんな事わかつとる。でも　ああ。でも……　でも……　あいつは一度も言い訳をせえへんかった」

そして――

「笑えトンガリ…… おまえはやっぱり笑ってるほうがええ カラッポなんて言うて 悪かった……」

——彼もまた逝ってしまった。

大事なものをいくつも失ってきた。彼の身体は言うまでもなく傷だらけ。しかし、ナイブズのいる場所に行かなければならなかった。レムの最期の言葉だけが彼を突き動かしていた。

ヴァッシュの左腕は義手だ。その左腕はナイブズによって奪われた。そして、その腕は野に捨てられたかと言うと、それは違う。ここでもう一人紹介しよう『レガート・ブルー・サマーズ』という男だ。何故この男を紹介するかと言えば、この男がヴァッシュの左腕を移植されており、ナイブズに忠誠を誓い。そして、ヴァッシュの心を一度は粉々に砕いたからに他ならない。

この男の怖い所は感覚を持たせたまま他人を操り、人間の出せる限界まで弄る事が出来ると言う点だ。例えば、これは実際やった話だが、車が一台あったとする。密閉された荷台には恐らく入れても6人が限界という広さに、数十名を操って入れて行く。車の下からは真赤な液体が流れ続け、上からはこれから入れられる者の悲鳴がこだまする。当然感覚はあるわけだから、無理矢理に押し込まれ、骨が軋み折れる。骨が内臓を突き刺し皮を破る間も痛みは続いている。

そう言った事が冷静に出来る男であつた。

彼の使命は『ヴァツシュ・ザ・スタンピードに永遠の苦しみを与えること』だつた。レガートはヴァツシュに「自分の意思で僕を殺せ」と言う。そう、レムの命を大切に考える。それを行動原理にし、不殺を心に150年以上も生きてきたヴァツシュにとってそれは残酷以上のなものでもなかった。「引き金を引かないと、君の大切な人が死んじゃうよ？」と、人質まで取りレガートは引き金を引かせた。レガートは歪み微笑つて逝つた。

「人を殺したんだ……もう駄目だ……レム、どうしたらいいのレム……教えて……僕はどうしたらいいの？」

壊れた硝子。

その姿に伝説の面影はなく、尊厳も見当たらない。コレは本当に人間台風なのか？^{マノイド・タイフーン} いつもの笑顔も思い出せないほどにやつれ泣き喚いた。撃つ相手の急所を外し、掠り傷でも手当まで施す優男はあの日、レガートの頭部をゼロ距離で撃ち抜いた。

——人間は止まらなかった。

人間とは理性がある者。理性があると言う事は。理性の箍^{たが}があり、それが外れると言う事。そして、この世界に生きる者の箍は外れやすい。それ故に人間は命を軽んじる事がある。大事な人を殺されれば奪い返す。それが当たり前だと。殺されれば殺す権利が生まれると言う結論に至る人間が多い。

それ故に。

「俺の友人は何故死んだ！ お前がジユライを！！」

「あんな惨い事をしてお前はのうのうと生きるのか！！」

「死んで償え！！」

弱り切った男を車で引き摺り回し、傷めつけ、殴打し、何度も何度も繰り返す。ヴァツシュは何も言わない。ただ。今までの事は自分がやったと、自分はヴァツシュ・ザ・スタンピードだと言っただけだった。

「やめて下さい！！ この人はそういう人じゃありません！！」

そうだ。全ての人間が悪いんだったら滅んじまえと思うよ。ナイブズが正しいってな。そう、止める奴もいるのさ。彼女の名前は『メリル・ストライフ』ヴァツシュを保険の仕事で追いかけて回していた人間だ。最初は彼女も「これが伝説のガンマン？」と真面目に疑ったものだ。ドーナッツを頬張り垣根無しに笑う男。あらゆる事件は、手段はともかく死人無しで解決して行く男。そう、そんなヴァツシュって男は、初めて自分の手で人を殺してしまった。落ち込む彼には怒りをぶつける人間がいて、レムと同じ事を言うメリルは、怒り狂い理性を無くしかけていた人を止めた。

「誰も……人の命を奪う権利なんてありませんわ」

人はやり直せると。生きていればやり直せると彼女は言う。ヴァッ
シュはその言葉に何かを見出し、最後の場所へと向かった。何人も
死なせ何人も裏切ってきた事を重く受け止め直し、未来への切符は
いつも白紙だと言う事を彼は思い出したのだ。

—— ヴァッシュ！ ナイブズを独りにしないで！！ ——

大きい十字架を背負ってきた紅いコートの同族にナイブズは聞く。

「楽しかったかい、人間として生きて？」

そのコートの下には、あれからどれほどの傷が増えたのか。

無駄だとは分からなかったのか。

僕らは人間なんてモノに使われる存在ではない。

それを自然な表情で聞く。

答えは分かっている。

目の前の男は何度も言う事を聞かなかった。

こいつをこうしてしまったのは、レム。お前の所為だ。

そして、深紅のコートの男は自信を持って答える。

「ああ、最高だったとも」

間違いなんかじゃない。

間違いなんかじゃないんだ。

二人の空気はとても穏やかだ。

そして、ヴァッシュは銀色の銃を抜き、ナイブズに向けて撃ち放った。

その銃声が決戦の火蓋を撃って落とした。

意識は覚醒する。

「う……ん」

「起きたか遠坂……ほら」

士郎はティッシュ箱を差し出す。そこで初めて気付いた。自分が泣いているのだと言う事に。周りを見渡せば凜が最後に覚醒したらしい。誰も彼もが黙ったままだ。涙を拭う桜がいる。腕を組んだまま柱に寄り掛かるアーチャーがいる。湯呑を握ったまま顔を伏せているバゼットがいる。時計を見れば午前5時過ぎ。数時間の出来事だったようだ。

誰も見たモノについて喋ろうとしない。語ろうとしない。少しして、口を開いたのは家主だった。

「人間じゃなかったんだな……いや、そう言うんじゃない……何て言ったらいいのかわからないけどさ……」

「憧れたか」

いつものアーチャーなら鼻を鳴らす動作も付け加えたであろう。しかし、そこには侮蔑や憐れみ等はなく敵視もなかった。そうだ。それはきつと憧れた。人間以上に人間らしい男。理想を具現化した男だった。全てを救うヒーローだ。少なくとも衛宮士郎にはそう映って見えた。

「凜、少し良いか」

アーチャーは朝日の昇りきらない寒空の庭に呼んだ。

「何よ？」

涙を拭った凜にアーチャーは謝罪した。

「私は元より記憶は失っていなかった」

「……どういう事？」

「私の真名は……【エミヤ】だ」

「え……エミヤ？」

それは衛宮士郎の未来を具現化した存在。英霊エミヤ。投影魔術を

使い、剣技は我流。見てきたモノに苦しみ、自ら衛宮士郎を殺す事を決めたエミヤシロウだった。しかし、目の前の男は全てを告白した。――仕切り直すと。そう言った。

「アーチャーが士郎……信じられないけど……うつん。投影魔術に同じ夫婦剣。でも、どうして？」

「なに、あの傷だらけのバカの過去でどうでもよくなった……精々殺さないように協定を結んでいる内は守り続けようじゃないか。鍛え直さんといけないだろうしな」

初めてアーチャーの殊勝な心掛けが見えた瞬間だった。

不意に足音と、少しして洗面所の方から水道の流れる音がした。そして、居間に顔を出したのはこの家に住む最後の一人、ガンナーだった。

「あ、あれ？ み、みんな早いね……もしかしてみんなもドーナツの限定で並びに行くのかな？」

「ガンナー。申し訳ありません」

マスターであるバゼットは頭を下げる。他のマスターも頭を下げる。下げないのはセイバーを除くサーヴァントであるアーチャーとライダー。そしてイリヤスフィールだけだった。

「ま、マスター？ み、みんなも？ どうしたの？」

「勝手ながらあなたの記憶を見ました」

「……そっか……あー、ね？ 楽しくなかったでしょ？ なははははっ……」

「どうして笑っていられるんですか……全くあなたは。怒らないのですか？」

拍子抜けしたバゼットは頭を手で押さえている。

「ガンナーらしいと言えらしいけど……傷、見せてくれない？」

「いっ！？ ぬ、脱げと仰いますか！？」

「違うわよバカ！ ……ただの興味よ」

「私も多少は気になります」

「わ、私は少し怖いんですけど、見たいです……」

「目が怖い！ ちょっ！ ライダーちゃん！？ セイバーちゃん！
？ 何故に抑えつける！？ 見てないで助けてくれないか君いっ！」

「む、無理だ」

「ああ、無理だな」

士郎とアーチャーは一步引いて後手に回っている。

「ノオオオオオオ~~~~!!」

数分後、関節技などで苦しんだヴァッシュは仕方なく上だけを脱ぎ、言われるがままにヴァッシュは左手の義手も外した。興味津々でマスター陣、サーヴァント陣はその傷だらけの傷を見る。しかし一人だけ、その輪に収まらずお茶を飲みながら遠目に眺め見る者がいた。

興味がある。しかしそれは、ただ見たい。という感情からではなく、ヴァッシュの過去を見て、その結果である傷を見て、改めてガンナーと言うイレギュラーなサーヴァントを値踏みする様な眼であった。

第09話 「ヴァッシュ・ザ・スタンピード」(後書き)

感想は随時受付中です。

- ・ 宝石魔術でこう言う事が出来るかなんて知らない。知った事か！
- ・ アーチャーの記憶が最初から問題なかった？ そんな事知るか！
- ・ この話を書くにあたって、TRIGUN全巻マキシмумも合わせて買い直しました。そんな事知るか！！ DVD BOXも最後まで見たわ！ 書きたい事まだあったわ！！ でも知るか！！

さてさて、またおふざけモードに戻ったかと思いきや、誰やねん！
輪に入らずに値踏みしてる奴は！！ 想像にお任せする！！

あー疲れた。何日使ったよ この話にw

第10話 「聖職者」(前書き)

ここに来るのも4か月ぶりっすかね……。

や、やつほ……。

うむ、返事無し!!

いまだ必殺! 隠れて投稿!!

第10話 「聖職者」

「やあ」

「あなたは！！……ここでやる気？」

「一緒に食べない？」

サーヴァントであるガンナー。ヴァツシュ・ザ・スタンピードは大きい紙袋に大量に詰まったドーナッツを一つ私服のキャスターに差し出す。キャスターは怪訝に思いながらも、受け取るだけ受け取った。口にはしない。毒が無い事はすぐに分かった。それでもキャスターは口にしなかった。

「どういふつもりかしら？」

「んー……ちよつとね。マスターたちに過去を見られちゃってさ、少し落ち込んでるのボク。ヤケ食いに付き合ってよ」

「筋違いねボチ。これ一個だけよ？」

少し鼻を鳴らし、キャスターはドーナッツを千切って食べるように、小口分を摘まんだ。

「……君は自分のマスターが大事だろ？」

「当然ね。誰でもそうじゃないかしら？ 自分のマスターが死んだら自分も危ないんだから、大事に決まってるわ」

「ん、でも君の場合、もう少し特別に見える……どうかな、多分戦わなくても良いと思うんだ僕達」

キャスターは正直驚いた。もちろん表面には出さない。そして、またマスターとサーヴァント以上の関係と見られた事に嬉しさすら覚えていた。しかしそれは――。

「――無理ね。私の見立てが間違つてなければ、あなたはあの可愛らしいセイバーと同じタイプのサーヴァント。騎士道なんて持ちだして来ないでしょうけど、似てるわ。そして私は、あなた達が許せない行為をして生きながらえている悪いサーヴァント。どちらか^{カシナキヤ}が死ななきゃ解決しないわよ？」

ほらね？　そう言わんばかりに肩を竦めてキャスターはもう一口分千切る。

「それも考えてきたんだ。それが魔力供給の話なら、マスターと関係をもてばいい」

「はあ？」

ヴァッシュはキャスターにマスターとの性行為を勧めた。マスターとの関係も更に深いものとなり、魔力も供給される。わざわざ他人の命を奪う必要もない。その言葉にキャスターは少し考え、真っ赤になって千切ったドーナッツを落としてしまう。

「な、なナななんて事を言うのよ！？」

「僕は人が死ぬのが苦手だ……過去を見られたと聞いて、僕も少し

思い出しちゃってさ……やっぱり戦いたくないんだ。君が関係の無い人たちの命を奪っているのも辛い」

赤面したキャスターを余所にヴァッシュは冷静にドーナッツを口に運ぶ。

「……本当にサーヴァントらしくないイレギュラーね……条件があるわ。でもそれでも戦うしかない場合もある。どうかしら？」

「条件って？」

「私にもあなたの過去を見せなさい。それで判断するわ」

「酷いな……結構つらいんだぜ？」

「戦うのだってつらいわよ。選択肢があるだけ良いんじゃないかしら？」

——後日。セイバー・シロウ&アーチャー・凜を傍に置き、監視下の下、キャスターはヴァッシュの記憶の宝石を飲み込んだ。キャスターは意識を手放し、眠りに落ちる。この間に討ち取れば。と考えるのが普通のサーヴァント・マスターというモノだ。しかし、最たる異常者がそれを阻む。キャスターも絶対的と言っても良いほどにこの異常者を信じた。この異常者は疑われる事があっても疑う事を知らない異常者だと。嘘は吐けないモノだと信じた。

「ホントに、あんたは何を考えてるのよ……」

「全面的に同意です。ガンナーこれは戦争なんですよ？ いい加減にして貰いたい」

「でもさ、戦争だからって戦わなきゃいけないなんて悲しいだろ？ 誰だって痛いのがじゃん？」

苦笑いを浮かべながら首に手を置きヴァッシュはそう言い放つ。過去を知ってしまった以上、それ以上深く突っ込む事はその場にいらる誰にも出来なかった。

ガラッ

「ガンナーここにいましたか……ってキャスターじゃないですか！？ 気配も無く戦っていたというのですか！？」

「あゝ、違うんだバゼット。ガンナーが連れてきてさ……」

「ガンナーの過去を知りたいんだって……。もう、聖杯戦争ってなんなのよ……」

「場合によっては、キャスターもこの戦いから退いてくれるそうです」

「……」

シロウは少し慣れてきたのか、いや、自分と同じような考えに元々共感している節はある。周りの凜などがジト目で見てくるので苦笑いになってしまっている。

凜は家名を背負ってきたし、父親が前回の聖杯戦争で敗退した事もあり、ガンナーに対し常に困惑を抱いている。もちろん、ガンナーのやり方に賛同してしまう点も少なからずある。言峰のこともある。この戦いで最も悩んでいるのは彼女かもしれない。

セイバーはマスターであるシロウの言葉に従うだけだ。口出しは

する。でも強制はしない形をとっている。ちなみにドーナッツを食べ始めたので口出しも出来なくなった。

アーチャーは寡黙だ。シロウを殺す目的を除外し、ただ、目の前の男のやり方に興味がある。と言ったところだろうか。自分が出来なかった事をこの男は平然とやってのけるのだろうか……。マスターと同じく考える男はあるが、悩むというよりは、疑問を持つというところだろう。

「ガンナー……」

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ ……あれ？ マスター？」

いつものようにマウントを取りに来ないバゼットに疑問を覚え、ヴァッシュはバゼットを見据える。そして、バゼットはその疑問に答えるように溜息を一つしてから口を開いた。

「今一度明らかにしておきたいガンナー。聖杯で叶える夢はありませんか？」

「僕にはないよ」

「バーサーカーは脱落しましたが、気持ちは変わりませんか？」

「……うん」

更に溜息一つ。バゼットは完全に諦めた。このサーヴァントと出会ったから今まで感じてきたモノが確定され固定され排除することは叶わず、更に言うとするならば、バゼット自身もそれでいいとさえ思ってしまったている。

根源に至る。そのための願望器。

そんなモノは必要ないと。

—— キャスターが目が覚めると夕方へと陽は傾いていた。

「ど、どうでしょう?」

ヴァッシュはキャスターにゴマすりをしながら返答を求める。

「……手伝わないわ。干渉もしない。終わりを静かに待つだけ。それでいいかしら?」

「十分です御主人様あ!!」

「あなたのマスターは私です!!」(ギュギュ……)

「ごめんなさい! ごめんなさい!!」

「本当に不思議なサーヴァントね……飼っておきたいわ」

「ヴァッシュ」

「ブワッ!!!」

「ノオオオオ~~~~!!」

ズシャンッ!!!

「ガンナー静かにしてください!」

「うるさいわよ!」

「ボクだけっすか!？」

イリヤダイブを辛うじて受け止めつつ、多勢に怒られるサーヴァントがいる。そして、先ほどキャスターを玄関で見送ったサーヴァントとマスターたちは、最後とも言える作戦会議を始めた。

「アサシンとキャスターはセットだから」

「これで残りは……」

「金色のアーチャーと、ランサーね……」

「アーチャーは受肉してるから……マスターなんていないのかしら？」

「ランサーは言峰ですよね」

凜・シロウ・バゼット。アーチャー・セイバー・ライダー。の5人は話し合いを。さらには夕飯を作り始め、ヴァッシュは邪魔をしないようにと、それに背を向けイリヤを膝に乗せ、縁側にて一緒にドーナッツを食べている。

「ねえガンナー。あなたは作戦会議しなくて良いの？」

「ん？ んん、良いんじゃないかな？」

「ふーん♪ ドーナッツ貰うわね♪」

「ん？ うん……何か楽しそうだね？」

「そうかしら？」

「ん〜何となくね」

「イリヤちゃん、ヴァツシュさん。これから夕飯なので食べ過ぎると……」

「余裕つすよ〜、なーはっはっはっはっ〜」

「さくらのご飯なら平気よ。それにドーナツは別腹よ」

その日の深夜。ガンナーは一人、衛宮の家を後にした。誰に言うでもなく昼夜問わずに動き回る彼を縛るモノは何もなく、単独行動のスキルは彼を自由に行動させていた。

「ほう、イレギュラーのサーヴァント一人で、こんな夜更けに何用かな？」

—— 出かけた先は、言峰教会だった。

「あんたは聖杯で何を願うんだい？」

オレンジ色のレンズのメガネを スチャッと掛け、ヴァツシュは

右手を腰元に添える。

「何も」

「何も？　じゃあ何故マスターとして暗躍している？　何故彼女の腕を斬り取った？」

「イレギュラーのサーヴァント、ガンナー。私の願いはね、君達が叶えてくれているんだよ」

「……？」

「殺し合い、苦しみ合い、戦い抜いたモノが歪んだ願いを聖杯に願う、聖杯が望まれた歪んだ願いを更に歪めて聞き入れる……愉しいのだよ。ああ、私は満たされる。これ程愉しい事があるのか？　しかし、ガンナー。君は最初こそ愉しませてくれたが、そこまで平和を望み叶えられてしまうと鬱陶しくもある。ここらで消えて、絶望する仲間の表情を眺めたいモノだ」

「アンタは聖職者じゃないのか？」

それは、ヴァッシュの中で明確な比較対象者が存在していた。孤児院のまねごとをやっていた男。大きな十字架を背負い、何度も不甲斐ない自分を叱咤して来た男だ。タバコを吸う、人を殺すことも多々あった。共に闘うことも、銃を突きつけ合うことだってあった。でも、それでも彼には理由があった。一言で片付けるとしたら『仕方がない』という言葉だろうか。彼も『仕方がないんや、誰かがやらなアカンねん』と口にしていた。勿論、仕方無いなんて言葉で片付けられるものではない。しかし、目の前の男はどうだろうか。その言葉すら適用出来ない。

「聖職者だとも。何人もの人間を救った。既に知っているかもしれないが、第4回の聖杯戦争はこの冬木で行われた。大火事として処理されたが、その爪痕は酷いものだった。何人もの市民が巻き添えをくらい、親と別れることになった子供も数多くいた」

「やめろ……」

ヴァッシュは既に知っている。目の前にいる男の黒さを。凜から聞いた情報だと、聖杯戦争に参加していた一人だ。凜の父親を救う事は出来なかったらしいとまでは聞いた。しかし、ヴァッシュは更に深くまで読み取っている。いや、自然と分かる事なのかもしれない。しかし、その惨忍さを信じ切れればの話だ。

「痛い、苦しいと呪祖のように叫びのた打ち回る子供を解放してあげたこともある。命を切り離してあげてね」

「ヤメロ！」

目の前の男は自分のマスターであるバゼットの腕を斬り落とした男だ。

前回の聖杯戦争から生きながらえているもう一人のアーチャーのサーヴァントがいる。

前回の聖杯戦争に参加していた。

「ランサー」

「よお、また会ったな拳銃使い」

言峰の後ろから現れるように霊体を実体に戻したのはランサーだ

った。

「やあ、元気だったかい？」

「けっ、食べねえ奴だぜ。じゃあ一丁やるか」

「待てランサー」

「ああ？」

「どうだろうか？」

「ふん、良いだろう」

足音は更に奥から響いて来た。顔より先に現れたのは声だった。言峰はその男に対し、命令でもお願いでもなく、どうするかを判断を委ねた。その顔が現れた時、ヴァッシュは確信の顔を浮かべ、ランサーは睨みを利かせた。

「アーチャーのサーヴァント……やっぱり」

「ほう、知っていたか……いや、セイバーかなるほど」

「俺だけじゃ信用ならねーってわけか言峰」

「最速を超える速さで互角だったのだろうか？」

「駄犬は下がっているが良い。我だけで十分だ」

。

（へー、面白そうな事になってるじゃない♪）

教会に新たにやって来た侵入者がいた。しかし、誰もその事に気づきはしなかった。

（あなたの全力、見せて貰うわねヴァツシュ・ザ・スタンピード）

第10話 「聖職者」(後書き)

感想は随時受付中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2425q/>

Fate/Love & Peace

2011年10月7日21時57分発行